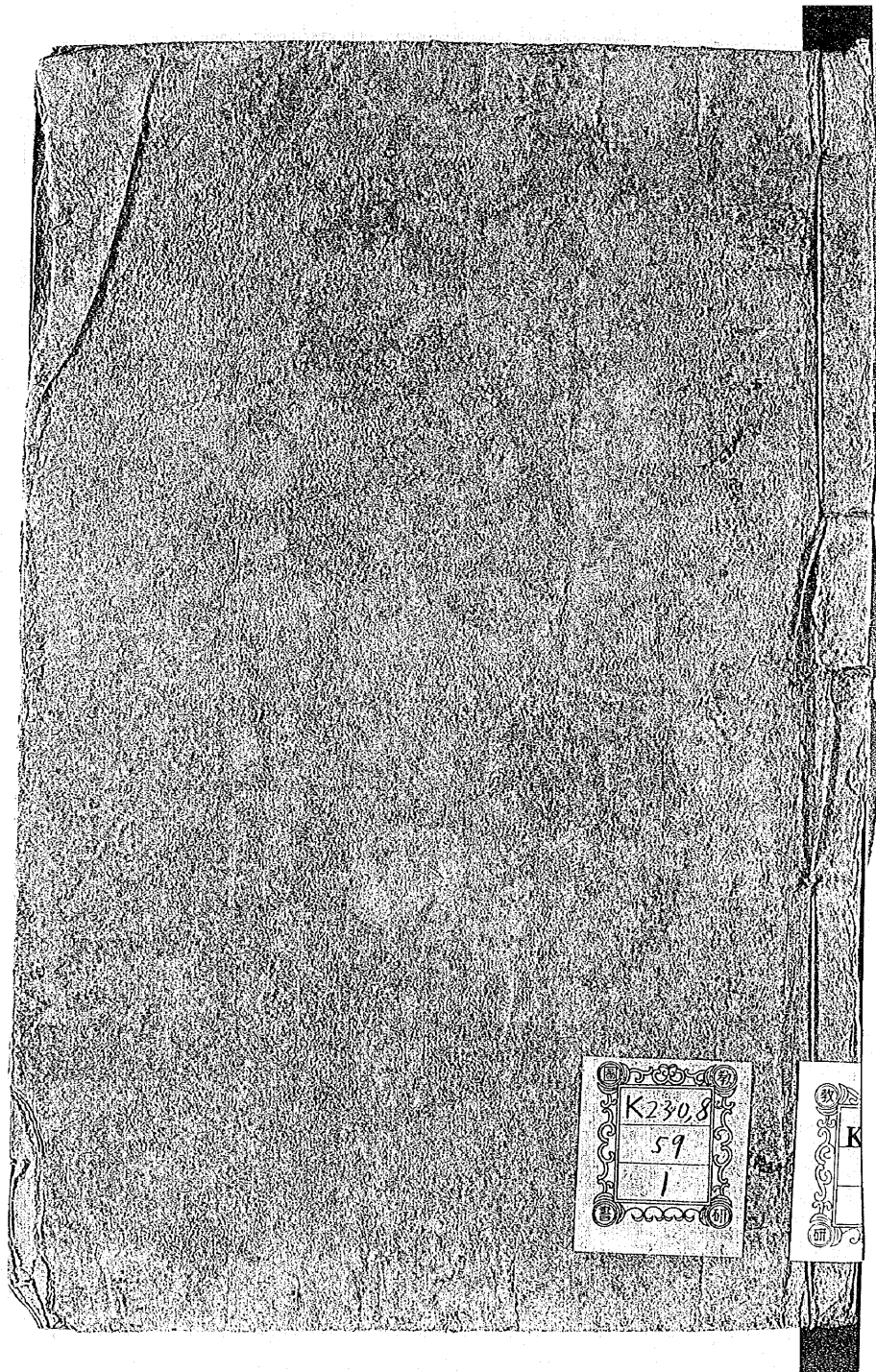




K230.8

59

1



下田歌子監修
帝國婦人協會編

書
6783
816

日本女子學讀本

東京株式會社明治書院

1951. 文部省寄贈

日本女學讀本卷一 目次

一、御代の光	一
二、國花	芳賀矢一 六
三、花の色	三好學 九
四、花の香	同 一八
五、千里の春 その一	大和田建樹 二三
六、同 その二	同 二六
七、樂し嬉し韻文	同 三一
八、はがきだより	三四

檢定
文部省
法願圖書

目次

九、少女の嗜	下田歌子	三六
一〇、萩山直女	同	三八
一一、心のまゝになるならば(韻文)	武島羽衣	四六
一二、家庭談話會(その一)	新保磐次	四九
一三、同(その二)	同	五五
一四、葉山の靈夢		六〇
一五、日本海の海戰(その一)	新保磐次	六四
一六、同(その二)	同	七四
一七、潜航艇を觀る		七九
一八、東京	平出鑑次郎	八九
一九、世の中	坪井正五郎	九六

二〇、都會と田舎	坪内雄藏	一〇二
二一、養蠶	下田歌子	一〇七
二二、田植の歌(韻文)		一一〇
二三、蒔かぬ種は生えぬ	山崎水郎	一一三
二四、雜草	幸田露伴	一一九
二五、農業の樂	徳富猪一郎	一二〇
二六、皇后陛下の御誕辰		一二三
二七、螢の話	渡瀬庄三郎	一二五
二八、夏の樂	徳富猪一郎	一二九
二九、夏(韻文)	中村秋香	一三五
三〇、暑中見舞の文 同返事		一三六

三一、夏季休暇……………	下田歌子……………一三九
三二、俚諺十則……………	……………一四一
三三、自修……………	坪内雄藏……………一四二
三四、明治天皇の御遺物を拜すその一…笠井信一……………	一四七
三五、同……………	その二…同……………一五三
三六、病氣見舞の文 同返事……………	……………一六三
三七、女子と手藝……………	下田歌子……………一六五
三八、眞の飾……………	金森通倫……………一六八

卷一 目次終

日本女學讀本卷一

一、御代の光

今上天皇陛下、御名は嘉仁、明治天皇第三の皇子に
おはします。明治十二年八月三十一日御降誕あらせ
られ、九歳の御時儲君に御治定、十一歳にて皇太子に
立たせ給ふ。同じき四十五年七月三十日、先帝の崩御
あらせ給ふや、直に踐祚の儀を行はせ給ひて萬世一
系の皇位を繼がせられ、大正四年十一月十日、畏くも

儲君

踐祚

龍鳳の姿

啓沃

登極

即位の大禮を挙げさせ給へり。陛下聰明にして英武、夙に龍鳳の姿を具へさせ給ふ。東宮に在らせ給ふこと二十餘年、常に啓沃の侍臣を召して治國の要道を究めさせ給ひ、屢各地に行啓して庶民の疾苦を問はせ給ふなど、盛徳美事數ふるに違あらず。御登極の後は一に先帝の遺業を紹がせ給ひて、内國運の發展を計り、外世界の大戦に參して列強の間に重きを爲させ給ふ。

皇后陛下、御名は節子、故從一位大勳位九條道孝公第四の御女におはします。明治十七年六月二十五日

溫良貞淑

行啓



御降誕、御年十七にて皇太子妃の宣下を受けさせられ、大正元年七月三十日、今上天皇陛下の御踐祚と共に皇后の御位に直らせ給へり。陛下溫良貞淑にして仁慈の御徳に富ませ給ひ、屢女子學習院等に行啓せさせ給ひ、女子の教育を奨めさせ給ひ、又、御親ら蠶を養はせ給ひ

女紅

て女紅の業にいそしませ給ふ。赤十字病院慈惠醫院等に臨ませ給ひて、傷病者を慰問せさせ給へること亦一再に止まらず。わけても戦役の事ある毎に、御親ら縋帶を作らせられ、女官達をしてこれに倣はしめ給ひ、且敵國の俘虜に對しても義手義足を下し賜へるに至りては、一視同仁の大御心いと尊くこそ覺ゆれ。又、皇太子殿下を始め奉り、諸皇子殿下の御慈訓の如き、寔に吾等臣民の範と仰ぎ奉るべきこと多しと洩れ承るぞ畏き。

皇太子殿下、御名は裕仁、明治三十四年四月二十九

一視同仁
慈訓

皇室典範
大正五年十一月三日御年十六にて立太子式を挙げさせ給ひ、同じき八年五月七日御年十九にて皇室典範の定むる所に依り御成年式を挙げさせ給へり。第二皇子淳宮、雍仁親王殿下、第三皇子高松宮宣仁親王殿下、第四皇子澄宮、崇仁親王殿下、つぎくに御降誕、皆御健かに御成人せさせ給ふ。あはれ大内山の峰の松は枝をつらねて、千代に八千代を重ねさせ給ふぞめでたき。

蒼生

日御降誕、大正五年十一月三日御年十六にて立太子式を挙げさせ給ひ、同じき八年五月七日御年十九にて皇室典範の定むる所に依り御成年式を挙げさせ給へり。第二皇子淳宮、雍仁親王殿下、第三皇子高松宮宣仁親王殿下、第四皇子澄宮、崇仁親王殿下、つぎくに御降誕、皆御健かに御成人せさせ給ふ。あはれ大内山の峰の松は枝をつらねて、千代に八千代を重ねさせ給ふぞめでたき。

惟ふに兩陛下の上に在しますや、誠に日月の天に懸れるが如し。大日本帝國の蒼生たるもの、誰かその

無邊

冠絶

御光を仰ぎ奉らざらん。吾等幸に生をこの帝國に享
け、この聖代に逢ひて無邊の恩光に浴せり。宜しく世
界に冠絶せる日本固有の婦徳を發揮し、以て皇恩の
萬一に報い奉らざるべからず。

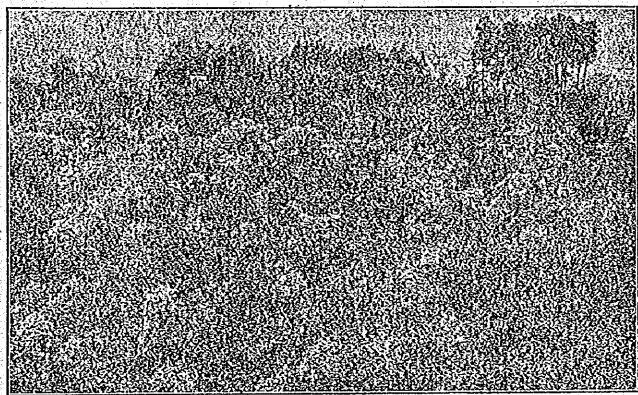
二、國花

芳賀矢一

爛漫

我が日本人の國花として世界に誇るに足るもの
は櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻の花が、山を埋め、
谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本固有の
美景である。

趣味



花の吉野山

支那の國花は牡丹である。
はでやかな牡丹は美しいに
相違ないが、あつさりとした
我が國人の趣味には合しな
い。香氣鼻をつく薔薇は、歐米
人の花の王と稱するもので、
其の色も棄て難く美しいも
のであるが、これも何となく
いやみがあつて、人の心を動
す趣に乏しい。我が國の櫻は

二十日草

その色がうす紅で、すきとほるほどあざやかに美しい。そして一樹に無數の花を着けて、一時に爛漫と残りなく咲く。空青く水清き我が風土には最もよく釣り合つて、深山・市中どこにあつても皆宜しい。二十日草の長い盛りもなく、薔薇の高い香氣もないが、時ならぬ雪と降つては、忽ち世界を花の中に包んでしまふのである。我が國の花の中の花は櫻である。

吉野山霞のおくは知らねども、

見ゆる限りはさくらなりけり。

これは満山花に包まれた吉野山の景色

満山

賞翫

花の雲、鐘は上野か、淺草か。

これは花に掩はれた大都會の花曇の日の光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花ではなくて、樹として賞翫する花である。否、多くの樹を植ゑ連ねて、その中に立つて賞翫する花である。上から見て愛でる花ではなくて、下から眺めて愛でる花である。春風四月、我が日本人はしばし花の世界の人となるのである。(月雪花)

三、花の色

三好學

三、花の色

九

花は植物の體の中で一番目立つ部分である。其の形の美しいことは言ふに及ばず、種々の色彩を現し、又香さへも加つて、遠方から見ても、其の所在が知れるやうに成つて居る。

花の色の種類と濃度とは非常に多様である。花のみならず、葉の色でも、決して一樣の綠色ばかりではない。綠色の種類に屬する色の中でも、濃いもの、淡いもの、又、黃色、橙色の混り加減など、變化の範圍は極めて廣く、精密に調べれば、綠色の中で數百種を區別することが出来る。花もこれと同じことで、均しく紅色

色彩

濃度

範圍

精密

色素

染料

の花の中にも數多の種類があり、また紫色、藍色などにも、それ／＼多くの區別がある。また色素が全く脱けて白になつたものや、極めて濃厚な赤紫で、殆ど黒色に見えるものもある。今日人工的に造られるアニリン染料には、無數の色の種類が出来てゐるが、それ等の色は、花に於ても實際に現されてゐるものが少くない。

すべて花の色は、見所によつて一樣でない。光線の反射の強い所と弱い所とでは、同じ花でも、其の色が多少違つて見える。室内と室外では、花の色が同じで

細胞

水彩畫

光澤

ない。全體花の表面には、表皮の細胞の外壁が突出して天鷲絨のやうに成つて居り、光線を或は強く反射し、或は屈曲するが故に、水彩畫などに現れたものと違つて、特殊の光澤が出て居る。此の光澤は、花の色をして一層著しくならしめるものであつて、殊に光澤の強い花では、恰も一種の色が光を放つやうに見える。かくの如き花を描くには、其の光澤を十分に現すやうにせねばならぬが、それは頗る困難である。

朝顔の花は、頗る色の變化に富んでゐるもので、赤の部分——赤黄・橙——に屬する色が種々あると同時に、

濃淡

また青の部分——青・藍・紫——に屬する色も數多く出て居る。殊に紫瑠璃藍などが強く現れて居り、又茶色や、殆ど黄色に類したもののすらも出て居る。其の他ヒヤシンスなども、花色の種類が多い方で、赤や青の兩方の色彩を現し、其の濃淡の上に於ても、頗る多様の變化がある。燕子花、花菖蒲、溪蓀の類も亦色の種類が多く、青の部分に屬した色彩の外に、赤色も現れ、又、青紫色も出て居る。けれども黄色に至つては、かの黄菖蒲を除く外は現れてゐない。尤も普通の花菖蒲にも花の一部黄色の所があるが、未だ此の部分特に發達

原色
野生

させて全體に及すことは出来ない。菊の種類は普通黄色が本で、それに赤が混り、茶色が出来てゐる。グリーヤなども、赤黄の部分の方が本色であるが、併し多少紫色も現れて来て、變化の範圍が段々大きくなつた。又蝦夷菊は紫色が普通であるが、赤も出来、白も現れて居る。此の外、櫻、梅、桃などは大抵皆赤に屬する色を現して居り、躑躅なども此等と同じく赤色である。尤も種類によつては、紫が、つたものも無いでは無い。すべて花にはそれ、原色があり、野生の状態にあつては原色だけを現して居るが、稀には原色から

培養

多少變つて、或は濃く、或は淡く、又は全く色が脱けて白くなり、或は絞となつたものが出来る。併し野生花では、此の色の變化は極めて少く、唯稀に見ることが出来るのみである。然るに一旦培養せられて、發生上の變化が起ると、之に伴つて色彩の變化も起つて来る。其の變化の範圍は、各自の花の種類によつて一様ではないが、いづれも多少の變化を起さないものは無い。殊に變化の性質の大なるものは、一舉にして數多の色彩を現して来る。即ち培養されてから、まだ年月の淺いにも拘らず、野生の花にも絶えて見られな

い著しい色彩が出て、赤から紫藍が現れ、また白が出來更に中間の色が種々に生じて來る。かの花菖蒲の如きも其の一例で、野生の赤紫の花から、現に無數の變色花が生じて來たのである。

溫室
鮮美

世界中美しい花のある所は少くないが、殊に有名なのはブラジル國である。同國には美しい花の咲く植物が非常に多く、世界各國の溫室で培養してゐる美しい植物は、大抵同國から出たものである。中でも蔓に成る草木で、美花をつけるもの、或は草花の種類、の如きものには、極めて鮮美な色彩を有してゐるの

熱帶
溫帶
寒帶

萬綠

發揮

が多い。印度、馬來地方のやうな熱帶の國々にも、無論美色を呈する花はあるが、其の類に於て到底ブラジル國に及ばぬ。概して熱帶の草木は、溫帶地方に於ける草木よりも、花色が濃厚で強い色彩を現してゐる場合が多いが、それは多く境遇によつて然るものである。美觀上より見ても、熱帶の如き萬綠の中に於ては、淡い色彩の花は更に目立たず、又、太陽の光の強い所では、極めて濃厚な色彩でなければ、十分鮮かに其の美を發揮することが出來ない。それ故熱帶地方に行くと、誰しも花の色の濃くて著しい事に氣がつく

が、これは自然の狀態が、自ら然らしめたものである。

四、花の香

三 好 學

普通の花の中で最も香の高いのは木犀であらう。十月上旬頃此の花が咲くと、四五町も隔つて居る遠方から知れる。沈丁花なども、一町位の遠方まで香が傳はる。又おほやまれんげ、厚朴の類でも、花が咲くと、其の周圍の空氣は一種の芳香を含んで來る。梅も亦香の高い花で、咲き揃つた時は、近所の空氣が風の吹く度に佳い香を送つて來る。櫻の花は一般に餘り匂

芳香

はぬものであるが、山櫻の種類で香氣の強いものがある。其の名を匂櫻といふ。

匂櫻は東京では四月下旬に咲くので、他の櫻よりも花期が遅い。花は大抵一重で、あつさりして赤い葉と打ち交つて咲く。此の花の盛りの時は周圍一町位の遠方までも香氣が傳はつて來て、花のありが、知れる。また樹の上には數多の蝶や蜂が來て、花に群集して居るのが見える。櫻の花の香の事は、昔から和歌にも多く出て居て、

けふもまた雲とや見まし山櫻

あつさり

事家
イがい

群集

にほひを送る風なかりせば
また

山櫻霞にもるゝにほひこそ

咲きぬと告ぐる使なりけれ
などゝあるが、これらは皆山櫻を詠じたものである。
しかし、山櫻の香は此の匂櫻に比べると至つて少い。
匂櫻のやうに色も香も備つて居るものは、色ばかり
で誇る他の櫻よりも、一層高尚で、且優美に感じられ
る。

花には自ら時刻によつて香の出るものがある。尤

一層

觀察

昆蟲

も多くの花には何時でも絶えず馨つて居るものも
あるが、また中には時刻をきめて匂ふものも少くな
い。前年自分が、爪哇の或植物園で觀察した石斛の一
種に屬する蘭科植物の花は、朝の十時頃にいつも佳
い香が出た。其の頃になると、ちやうど蟲が來て花を
訪うて居るのを見た。此の外にも、なほ時間によつて
香の出る花が色々ある。例へばマンテマの類は、夜に
なると佳い香がする。これは其の頃に特別の昆蟲が
花を訪問するからである。

植物には、又枯れた後に香の出るものもある。例へば

普通

酒精

獨逸、奧太利などの森林で普通に見るワルドマイス
テルは、八重葎に似た草で、花には一種クマリン性の
香氣がある。此の植物の葉や莖を取つて酒精に入れ
て置くと、同じ香氣が一層強く出て、酒精に香がつく。
又、海藻などの中にも、枯れた後に同様の香氣を發す
のがある。櫻の葉からも、枯れた後に同様の香が出
る。東京では櫻の葉を鹽漬にして櫻餅を作る。其の鹽
漬の櫻の葉に強い香氣のある事は、人のよく知つて
居る所である。これは即ちクマリン性の香氣である。

(植物生態美觀)

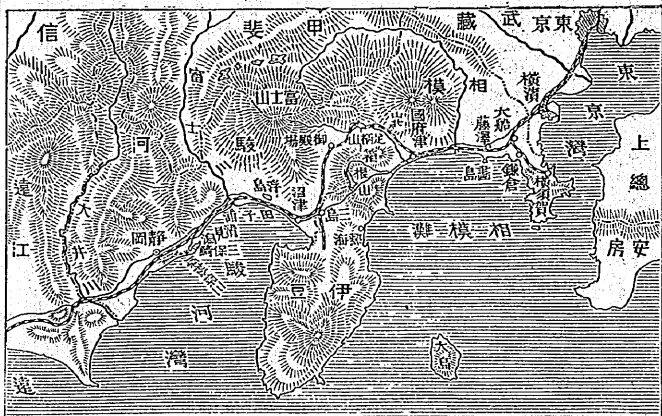
五、千里の春その一

大和田建樹

山青く浦霞む。千里皆春なり。此の間に一線を曳く
ものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下り
行くなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手に
して寫し出せるは、歌か詩か抑も畫か。

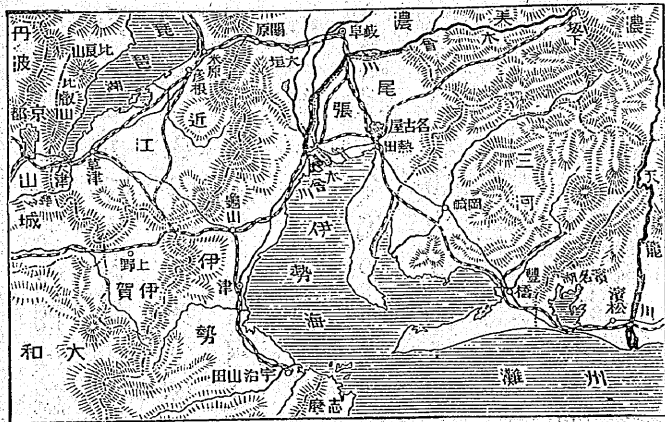
七砲臺の邊、波穩かにして、群れ飛ぶ鷗、落花の風に
飄るに似たり。帆を半ば張りて出て行く船あり、櫓を
操りて横ざる舟あり。房總二州の山々は霞に消えて、
視れども見えず。

造化の妙筆



松青きところ、桃の花紅なり。藤澤の野、山北の谷、人ごとに唯美しと呼ぶ。
三保の松原煙り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮き立つ雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。杳としてほの見ゆ

田夫



るは伊豆なるべし。富士は玉扇の倒にかゝれるがごとく、窓の右に立ち、また左にあらはる。
三尾の平原、麥は緑に、菜種は黄なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれつゝ、ゆけば、名にしおふ名古屋の城はまがはぬ影を見せたり。田夫は金の鰯を背に

して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して我が好む方へと人を勧む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横はりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡はいづれの處ぞ問へども答へず。霞にたゞまるゝ遠近の山影或は淡く、或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、栗津の松原ひとり昔を語り顔なり。

遺跡

鳩の浦

東寺

六、千里の春との二
東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へ

山紫水明

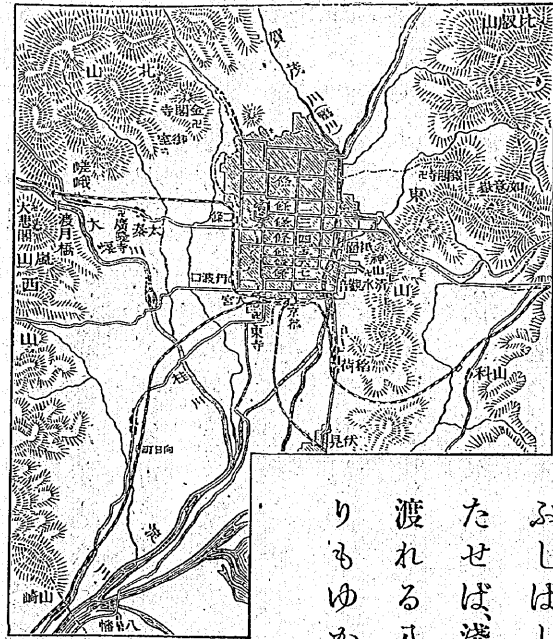
大原女

て歌ふ。最愛の母に逢ひ、なつかしき父と語るに似たるは、いつも京都に着きたるとき心地なり。山紫に水明なるところ、たゞ夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること、日に幾度ぞ。躑躅を柴に折り添へて戴き、連れたる大原女も、いつしか我が友となれり。如意が嶽より吹き來る春風は、軽く我が袖をはらひて、行くへは遙に堤の柳の絲にあり。

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音堂の前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一

幅の畫なるに、姥は此の間に立ちて「蕨餅めせ」など呼

ゆかし



ぶ。しばし憩ひて眺めわ
たせば、淺黄に藍に霞み
渡れる八幡山崎のあた
りもゆかしきに、東寺の
塔を松の間に
墨がきにせる
筆の力こそ面
白けれ。
燈火の影は

篝火

山彦

香雲

水に映りて、星の如く花の如し。祇園の夜櫻看んとす
る人は、神山へと向ふ。一本の老木は枝を垂れて、篝火
の焰に護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて
顔を打つ。田樂を賣る聲、茶を勧むる聲、この花の前後
に山彦を反し來る。西山の花看る人は、多く先づ御室
を指す。松緑に樓門赤く、茶煙絶えぬに颺りて、花極
めて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔
を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯
の歌高き梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて生ひ立つ松、その間を點

點綴

がよふ

夕陽

紙礫

綴して咲き誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。小舟漕ぎ
ゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く巖を洗
ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかよふとこ
ろ、此の美は彼の美と相映じて自然の彩色をなす。坂
を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅
の圖、柳、櫻をこきまぜて、さながら西陣を織り出せる
が如く、又友禪を染めなせるが如し。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽靜に鐘樓の
瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれど客來らず。少女
は落花を風に任せて眠り、兒童は門の仁王に紙礫を

打ちつけて去る。

寂寞

暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく鴨川に
襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字も姿を隠
しぬ。紫に、紅に、藍に、黒に、見るゝ色取られゆく山影、
淡く、濃く、青く、黒く消え行く人影、いづれ詩中のもの
ならぬはなし。天地唯平和、四圍唯寂寞。顧みれば西山
もなく、北山もあらず。(雪月花)

七、 樂し嬉し

大和田建樹

一、

七、 樂し嬉し

三十一

樂し、汽車のたび、
走る梢、飛ぶ野山、

あれくうしろに、
みるくうしろに。

吹く風、ゆく水、

飛ぶ鳥、咲く花、

たゞまどを

過ぎてぞゆく。

二、

嬉し、船のたび、

うかぶ鷗、立つ千鳥、

あれく波間に、

みよく岩間に。

やまくうらく、

沖こぐつりぶね、

ゐながらに

見つゝぞゆく。(雪月花)

九、少女の嗜

下田歌子

少女は花のやうなるべし。色麗しく、匂ひやかなるこそよけれ。例へば、打ち向ふ人の覺えず微笑みて、しはしは心の憂さも忘るゝやうなるべし。さりながら、此の花は、しめ結ひたる垣の内の花なるぞよき。日常の起居振舞もの言ひざま、すべて恭謙の徳溢るゝやうなるが中に、また一種犯すべからざる所あるべし。されば、少女の、人に對してはにこやかに愛々しく、萬づつゝましげに恥かしげなるはよし。事も無きに

起居
振舞
恭謙

獨を憚む

はしたなき

四肢

据ゑ

眩暈

からくくと笑ひ、身振手眞似に體を崩しなどせんは、いとあさましかるべし。君子は其の獨を憚む。ところをいへ。まして、年少の女子は、獨居るほどにも、いささかもはしたなき振舞あるべからず。如何にもしとやかにして、騒がしく輕々しからぬやうにあるべきなり。されども、これを取り違へて、身體四肢の發育に大切なる時期を、人形の様子に造り据ゑられてあれと云ふにはあらず。出來得べくば、其の衣服までも改良して十分なる運動をなし、西洋婦人のやうに高嶺にも登り大洋をも渡りて、眩暈頭痛疲勞などを覺えぬや

輕佻

うにしたいきものなり。

希くは、活潑と輕佻とを取り違へず、謙遜と卑屈とを誤らぬやうにせよ。仰ぐも高き築土の内の花、雲に聳ゆる色香の清く氣高き様ならんことを望ましかれ。

一〇、荻山直女

下田歌子

直女は美濃國岩村藩の家老荻山某の女なり。幼少の頃より慈愛の心深く、能く其の召使をいたはりけり。

或時、父某祕藏の梅の鉢植を庭に下して、下婢に水

秘藏

青磁

を澆ぐことを命じぬ。下婢は主人の命を受け、手桶に水を汲みて運びけるに、飼犬の赤頻に下婢にそばえつきて、追へどもく去らず。已むことを得ず、下婢は之をおどさんとして、あたりによりける小石を拾ひ、わざと犬に中らぬやうに飛びのきざま抛ちけるが、小石は側なる腰掛臺の角に觸れ、はね返りて後に据ゑたる青磁の鉢に中りければ、鉢はくわんと音して四つ五つにわれぬ。

下婢はその有様に打ち驚き、我にもあらず、あつと叫び、またいきもせず、その破れたる鉢をうちまもり

同情

居たりしが、果はこらへず、よゝと泣き始めぬ。

此の時、主人は既に外出して家に在らず、主婦も部屋に籠りて影だに見えず、たゞ十三四歳ばかりなる少女直が、縁側に出て、畫本やうの物を見てありしのみ。直はけたゝましき此の泣き聲に驚き、靜に庭下駄を穿きて下婢のほとりに至り、やさしき言葉もて事の由を問ひけり。下婢は益泣きまどひて答へんすべも知らざりしが、やう／＼に心を靜めて、とぎれとぎれにありし次第をものがたりぬ。

直女はこれを聞きて、いたく下婢に同情して、

「そのみ泣きたりとして何かせん。過は誰にもある習ぞかし。我、汝に代りて父上に謝せん。」

と、且慰め且諭しければ、下婢はよみがへりし心地して、手を合せて直女を伏し拜みぬ。

さるほどに、日も西に傾き、父も歸り來りて、樂しき晚餐のまゝとるは開かれぬ。直女は常にもましていかひ／＼しく、父の食事の給仕などしければ、父の満足斜ならざりき。かくて晚餐も了りければ、直女は時こそよけれと丁寧に手をつかへて、

「父上、わらはに一生の願あり、許し給ひなんや。」

といふ。父はほゝゑみながら、愛らしき少女の顔を打ち見やりて、

「改まりたる言葉かな。他人ならぬそちの願とあらば何なりとも聞いて遣さん。」

直女は嬉しげに、

「さらば、梅植ゑたる青磁の鉢をわらはに賜はれ。」

父は不思議さうに少女の顔を見て、

「そは遣しもせんが、そを得て何にかする。」

問はれて、直女は行き詰りぬ。されど言はて止むべきにあらねば、

「ともかくも、先づ必ず遣すといふ御詞をこそ承りたけれ。」

といへば、父は、

「さばかり欲しくば遣さん。」

此の詞を聞くや否や、直女は次の間に控へさせたる下婢を手招きして、その罪を謝せしめ、おのれも亦頭を疊につけて、

「彼の罪をお赦しあれ。」

といふ。父は不審はれやらず、其の言を聞き、

雙眼

と問へば、直女は恐れ慎める色面にあらはれて、事の仔細を落ちなく語りつゝ、さて父の顔をさも心配らしく打ち守りつゝ、雙眼に涙をたゞへて、返答如何にと待ちわびたり。父はそゞろに我が子の慈愛深き心根に感じて、下婢を顧み、

「そちはよき主を持ちたるものかな。赦し難き者なれども、嬢が切なる願に免じて、此の度はゆるしつかはさん。以後をきつと慎めよ。」

下婢は嬉しさに思はずわつと泣きぬ。直女も亦嬉しさに泣きぬ。かくて下婢は爾後萬事によく慎みて、

いと忠實に立ち働くに至れりとぞ。

撫育
到底

直女は、後故ありて一人の繼子ある家に嫁ぎたるが、その義理ある子に對する行、實に稱すべきものありて、當時の人のほめ者となれり。其の子は壯年にて死したれば、孫二人を育てけるが、亦よく撫育の道にかなへり。孫女他に嫁したる後も、祖母の事といへば、毎に涙を流して、

「わらはは、到底この世にして祖母の高恩に報ゆること能はざるべし。」

と歎じたりきとぞ。以て其の人柄の一端を察すべき

なり。(内國少女鑑)

一一、心の儘になるならば、武島羽衣

ゆふべの空を眺むれば

浮きて漂ふむら雲を

みねの嵐にはらはせて

かゞやき出づる望の月。

心のまゝになるならば、

取りてかざりて我が母の

朝の鏡にまゐらせん。

むら雲

望の月

寝よげに見
ゆる

しとね

あしたの野邊を眺むれば、

小草若草もゝちぐさ

たゞひとつらに生ひ立ちて、

寝よげに見ゆる青にしき。

心のまゝになるならば、

ねやにうつして我が父の

夜のしとねにまゐらせん。

かどの小川を眺むれば、

一一、心の儘になるならば

小さく優しき音たてて、
流るゝ水のそのうへに
散りてうかべる星の玉。
心のまゝになるならば、
取りてつらねてわが姉の
髪のかざりにまゐらせん。
遠きかなたを眺むれば、
赤青むらさき、とりまぜて、
色うるはしく染めなされ、

高くかゝれる虹の綾。
心のまゝになるならば、
取りて仕立てゝわが妹の
はれぎの帯に與へてん。

一二、家庭談話會 その一 新保 磐次

或日、夕飯がすんで、親子五人打ちそろひ、よもやま
の話をして居たが、父が「今日は皆が何か一つづゝ、お
もしろい話をしようぢやないか。なに皆が同意なら、
口きりは年役におれがする。」と、まづ澁茶を一口飲ん

よもやま

口きり

だ。

父「ある處に、ぢいさんとはあさん……ではない、ばあさんとはあさんとが、互に道を譲り合つてゐる。『まあお先へ』『まあお先へ』と果てしなく言ひ合つてゐたが、やがて、一人が『一體お前さんは幾つだね。』と尋ねると、一人が『わたしはい、六十九だよ。』と『うかい、わたしは丁度だよ、七十だよ。』それぢやあ、おまへさんがお先へ。して來年は私もおまへさんとおないどしになるね。』といつたとさ。一同大笑。

おないどし

父は妻の方を顧みて、さあ、年順にお前から梅子、三

千子、花子と、順々におやりなさい。」

母「わたしですが、わたしは近頃本を読んだことはなし、覚えてゐるのは瘤取か、雀の瓢箪ぐらゐるものですが、そんなものは、みんなが知つてゐるし、……梅さん、お前この間から何か讀んでゐるやうだから、おかあさまのかほりに、何か一つ話しておくれ。」

梅子「はい。それではおかあさまの代に一つ……。いつか奈良へ見物にまゐつた時に、運慶の作といふ佛像がありましたね。あの運慶の娘が越前といつ

佛像

診察

眉間の白毫

て、醫者の時成の娘の備後といふのと、一緒に御所奉公をしてゐました。二人とも口の達者な、心のはしつこい女で、折々面白いことがありました。或時、越前の額におできが出来ましたので、備後に向つて、「お局、ちよつと御診察を願ひます。」といふと、備後は、「はあ、眉間に白毫を入れたのですから、御心配はありませんぬ。」と申しました。

花子「ねえさん、白毫つて何。」

梅子「佛さまの額にある星のやうなものさ。」

父「うまいく。こんどはお前の分を。」

父「イヤコレは傷め
うぬが子に
けり」

母「續けざまでは、苦しいでせう。梅さんの分は一番あとへまはして、三千さんおやり。」

三千子「私ですか。昔希臘の田舎に、イソップといふ人がありました。或日、一人の旅人が通りかゝりまして、もしくは、むかうに見える村まで参るには、何時間ほどこゝりませう。」歩いてごらんなさい。「イヤ、何時間であの村へ参られませうか、それを伺ひたいのでございます。」歩いてごらんなさい。旅人は、じれつたくなり、「私のおたづねするのが、おわかりになりますせんか、あの村へ何時間で往かれませうかと」

御尋ね致しますのです。」といひますと、イソップはやはり、「歩いてごらんさ。」と繰り返しました。旅人は大に怒つて、「こんな物のわからない男はない。歩く前に、何時間かゝつてあそこへ往かれるかを知りたいから尋ねるのに、歩いてごらんさ。」とは何事だ。」といひますと、イソップもまた大に怒つて、「こんな物のわからない男はない。お前さんの足の速さを知らないで、なんて答が出来るものか。」といひましたとさ。

父「なるほど、兩方とも無理のない話だ。」

梅子「さあ花さん、あなたの番ですよ。」

一三、家庭談話會 その二

お世辭

夜會

花子「あの、西洋でも、學者にはずるぶんお世辭のわからない人があるさうです。ね。それにどこの國でも、女は手足のかはゆらしくて、目のぼつちりしたのがよいのでせう。それをね、或大學者が夜會に招かれて、或奥さんにお世辭を云ふつもりで、まあ、あなたのお手の大きいこと、そしてお指の太さといつたら、實に驚きますねえ。」といひましたので、側の

忠告

人が氣の毒がつて、先生の袖を引いて物蔭へつれ出して、大きいといふのはいけないと忠告しました。すると先生すぐにまた出て来て、奥様先刻は失禮を申上げました。しかしあなたのお目の小さいことは、誠に豆のやうでございます。といったさうです。一同大笑。

母「みんな中々うまいね。さあこんどは、梅さんお前の分をお話しなさい。」

和尚

梅子「それでは、私も一つお話を致します。昔、池の尾といふところのお寺に、禪珍といふ和尚さん

がありました。よい和尚さんでしたけれど、どういふ病氣か、鼻の長さが五寸ばかりで、その色が赤紫で、肌が蜜柑の皮のやうに粒だつてゐました。それに、その鼻がやはらかで、口の上へ垂れさがるので、す。それで、食事の時は、お弟子に板で鼻を持ち上げさせて食べました。この鼻の持ち方が、工合のあるものと見えて、只一人のお弟子の外は、和尚さんの氣に入りませぬ。」

父「鼻持ちのならぬ話だな。アハハハ。」

母「まぜ返してはいけませぬよ。梅さんおやり。」

まぜ返す

おちこ

梅子「或日、そのお弟子が病氣で、お側へ出て來られませぬ。それで和尚さんに朝の粥を上げるのに困つてゐると、一人のおちこが、なに私がうまく持つて見せます。」といつて、代りに出ました。なるほど鼻持の板でうまく鼻を上げて、好い工合に粥をす、らせますから、和尚さんも喜んで、「えらいぞ、えらいぞ、いつものよりは却つて上手だ。」など、譽めてゐました。處が、生憎おちこがクシヤミが出さうになつたので、脇を向いてハック、ツミといふ拍子に、鼻が板からはづれて、粥の中へボカ、ズリと落ちて、鼻

生憎

時ならぬ雪

は粥だらけ、あたり近所は時ならぬ雪をふらせました。一同また大笑。
梅子「ところが、和尚さんはまじめて、おれのだからいゝが、若し貴い御方のお鼻持に出て、こんな粗相をしたらどうする。」と、大層そのおちこを戒めました。一同また笑ふ。

腹の皮をよ

笑ふ門には
福來る

父「どれも皆おもしろかつた。大それた腹の皮をよらせた。一體、笑ふといふことは食物をこなして、からだの藥になり、おまけに、笑ふ門には福來る。」といつて、結構なことになつてゐる。これから後も、また一

週間に一度ぐらゐづ、今日の様な會をする事にしようぢやないか。

一同は父の考案に賛成して、この夜の談話會は面白く濟んだ。

考案

離宮

交渉

只管

一四、葉山の靈夢
申すも畏けれども、^{御用}皇后の宮には去にし一月より、葉山の離宮に御避難あらせられけるが、二月六日の夜、餘寒身にしむをも忘れ給ひ、白露交渉の急にして、やがて開戦ともなれば、我が海軍や如何に。など、只管

ゆめく

不肖

天皇の御上から

限

ものから

思ひ入らせ給ひて、御枕につかされたまひけるが、程しもなく、白き衣著たる男の、御前遙に畏みて、某は坂本龍馬にて候が、此度露國と戦はせ給ふとも、ゆめく御心を煩はしたまふことあるべからず。身不肖には候へども、海の御軍を守護し奉れば、大捷疑ふべくも候はじ。御心安く思召したまへ。と奏聞しけるに、宮には坂本とや。と、しばし打ち案ぜさせ給ふに、坂本龍馬にて候。とて、搔き消す如く失せにけり。

「異しき夢見つるものかな。」と思召すものから、さまで御心に留めさせたまはざりしに、七日の夜も亦同

ものす

瑞夢

じき夢を見たまひければ、八日の朝、侍醫を召して、世にも不思議なる夢を見たり。それは云々ぞ。との仰に、侍醫は畏みて、彼の海援隊をものせし坂本龍馬の靈にもや候ひけん。事あらん折、我が海軍大捷の瑞夢にて候。と祝ひ奉れるを、やがて主上聞こしめして、龍馬の功勞今はた新なるをおぼゆ。誰ぞ龍馬の事詳には知りたる。と宣へば、宮内大臣こそ。と近侍の人々の申すに、さらば召せ。と仰せられければ、此の由大臣へ申し通じぬ。

性行

大臣急ぎ参りて、龍馬の人物はかくく、性行はし

斜ならず

天機伺

夙夜

見をなはす

かじか、殊に、薩長聯合の爲に、井上馨と共に鹿兒島に赴きて、老西郷等と交渉せし始末は、馨こそ最も委しく存じ候へ。と奏聞せしに、御感斜ならず。さればこそ、忠義の鬼となり、今も我が海軍を護るらめ。これはまことに瑞夢なり。と仰せたまひき。井上馨が天機伺として参上せし折にも、此の事を親しく御物語ありきとなむ。

夙夜御心を懸けおはしますは、日露の交渉なりければ、遂に異しき御夢をさへ見をなはし給ひけん。これ、しかしながら、全く瑞夢におはしまして、其の明く

る日、仁川旅順の大捷を得たまひつること、不思議と云ふも愚なり。(軍國美談)

一五、日本海の海戦 その一 新保 馨次

踊躍
旗艦
動靜

さる程に、五月二十七日の曉天に、假裝巡洋艦信濃丸の無線電信は、敵艦隊見ゆ。敵は東水道に向ふものの如し。と報ぜり。全軍これを聞いて、踊躍し、各豫定の持場を固めたり。午前七時、哨艦和泉も敵を發見して、其の勢力、陣形、針路等を本隊の旗艦三笠に報じ、其の儘、敵の艦隊と接觸を保ち、時々刻々の動靜を報じつ

濛氣

黑白も見え
わかず

準備

つ、北東さして進航せり。

此の日、海上濛氣深くして、五海里以外は黑白も見え、わかざりしかば、敵はこれを幸に、我が艦隊の目を暗まして浦潮の方に遁れんと思ひしに、我が諸艦の報告によりて、數十海里を隔てたる敵の進退動靜の一々、我が旗艦に映ずること、鏡をかけて見るが如くなりき。沖の島に至るまでは、兵士皆戦闘配列に就きながら、隨意休憩を許されたるが、準備終りて、上官の巡視せし時には、兵士等砲彈等を枕にして、鼾の聲雷の如くなりき。古今の大戦を前に控へて敵前にあり

膽勇

嘆稱

壯觀

ながら、物とも思はぬ、この沈着なる膽勇を見て、司令官を始め、人々深く嘆稱し、「軍にははや勝ちぬ」と頼もしく思ひけり。
かくて、我が本隊は午後二時沖の島附近に敵を邀へ、遙に彼方を見渡せば、かねて諸艦の報ぜる如く、敵は二列縦陣にして、主力の四戦艦は右翼の先頭にあリ、司令長官の旗艦スワロフ真先に進み、又オースラビヤ以下の四戦艦は左翼の先頭たり。海防艦巡洋艦特務艦船等次第に濛氣の中より現れ出で、其の長さ數海里に互り、實に世界の壯觀たり。午後二時に近く、戦

興廢

傳誦

機已に熟しぬ。旗艦三笠の檣頭に大戦闘旗の颯と翻るや、戦闘の號音勇しく、旗艦は全艦隊に對して、「皇國の興廢此の一戦に在リ。各員一層奮勵努力せよ。」



東郷大將

と、信號旗を掲揚せり。この信號はネルソンがトラファルガルの海戦に、英國は諸君の努力を要求す。と信號せしと同じく、忽ち世界

に傳誦せられたり。

大鵬

巨鯤

こゝにおいて、我が主力隊は東郷大將直率の主戦艦隊を先鋒とし、上村中將の裝甲巡洋艦隊これに續きて、吉例の單縦陣を布き、正にこれ大鵬の雲に翰つが如く、巨鯤の浪を破るが如く、幕地に敵前に出で、出羽・瓜生・東郷の諸戦隊は、遶りて敵の後尾を衝かんとせり。

集中

敵はかくと見て、直に發砲を始めたれど、我が艦隊は静りかへつて應砲せず。射距離六千米突に入るや、斜に敵の前頭を横ぎりて敵と丁字を成せる我が主力隊は、こゝに一齊に敵の兩先頭隊に砲火を集中し

四顧冥々

百發百中

たれば、敵の諸艦も劣らじと應戦し、砲聲天地を碎くがごとく、海水湯の如く沸き返れり。此の日、西風烈しくして、砲烟海面に漲り、濛氣と相合して四顧冥々たり。物凄きこと言ふばかりなし。されども、我は陣形の優越なると技術の熟達せるとによりて、砲彈殆ど百發百中にして、敵の左翼先頭艦オスラビヤまづ大火災を起して戦列を退き、續いて旗艦スワロフ・二番艦アレキサンドル三世も火災を起して列を離れ、後續艦も亦續々と火を失せり。東郷大將は後日に至りて、「勝敗已に此の間に決せり。」と報告せり。

武者振

哨艦和泉は初より敵艦隊と觸接を保ちて來りしが、砲戰始ると見るや、急に艦首を回らして、敵の砲火の集中するを物ともせず、獨力應戰して、遂に本隊に合せり。和泉が此の武者振は、昔長湫の戰に本多忠勝が手兵三百を以て、豊太閤の數萬の軍と並び行き、遂に家康の軍に合したるに似たりとて、皆人嘆稱したりけり。

壓迫

かくて、敵は北上の道を遮られ、只南東に南東にと壓迫せられしが、かくては目的を達すべき道なしとや思ひけん、俄に北方に回頭し、死物狂の勢を以て我

猛射

が後尾に廻り出でんとしければ、我が主戰艦隊も急に十六點回頭をなし、北西に向つて敵の前頭を壓し、装甲巡洋艦隊は分れて敵の側面に出て、敵を中にし、て殆ど乙字を畫き、益猛射して再び敵を南方に壓したり。

血路

勢かくの如くなれば、敵は北方に血路を開かんこと遂に叶はじと思ひけん、次第に南方に遁るべく見えければ、我が主戰艦隊、装甲巡洋艦隊、諸戰隊こゝかしこに分れて、餘さじ漏さじと掩撃せり。されば、前に戰列を離れたるオスラビヤ・スワロフ・アレキサン

掩撃

壯烈

決行

ドル三世を始め、戦艦・特務艦等の破壊沈没する者少からず。此の間、鈴木・廣瀬の驅逐隊が、白晝壯烈なる水雷攻撃を決行せしは特記すべきことなり。

かゝる間に、夕陽已に黃海に没し、豫て定められたる驅逐隊、水雷艇隊、東南北の三面より漸次に敵に迫りければ、我が主戦隊は戦場を新手に譲り、全艦隊も一時引揚げて、明朝鬱陵島に集合すべき由を傳令せしめ、此の日の軍は果てにけり。

烈風激浪

豫て夜戦は水雷攻撃と定めしかども、朝來、烈風激浪を揚げ、夜に入りて波浪未だ収らず、水雷艇の不利

千載一遇

擬議
蜩集

照準

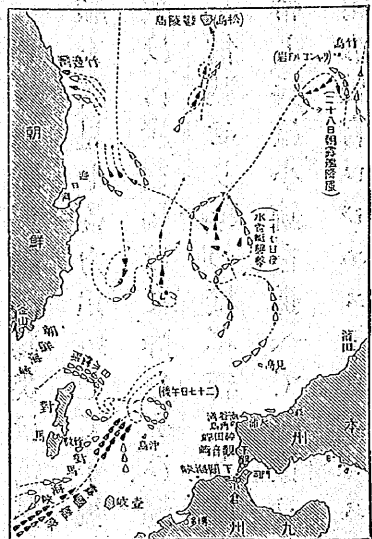
甚しかりき。されど、此の千載一遇の戦に一撃を試みずんば、生き残りても何かせんと、驅逐隊・艇隊、日没前より來集し、各先を爭ひて敵に當れり。敵は探照砲火を以て極力防戦し、白虹紫電、雨の如く海中に飛ぶ。夜戦の壯觀譬ふるに物なし。我が襲撃隊、いかでかこれに擬議すべき、一時に突進して敵の周圍に蜩集肉薄し、其の攻撃の猛烈なること殆ど言語に絶しければ、敵艦應接に暇なく、而も其の距離のあまりに近かりしたため、備砲俯角の度を過ぎて、照準を取ること能はざりき。此の夜戦に、敵の戦艦・装甲巡洋艦等の或は沈

没し、或は戦闘力を失ひしもの亦多く、これによりて、敵の陣形全く亂れたり。而して、我も亦水雷艇三隻を失ひぬ。

豫定

一六、日本海の家戦
明くれば二十八日、きのふの濛氣なごりなく霽れて、沖の鷗も見通すまじく、追撃戦には上もなき好天氣なり。諸戦隊皆豫定の如く、黎明より鬱陵島に向つて航行しありしが、早くも敵影を發見して、主戦隊・装甲巡洋艦隊・東郷瓜生の諸戦隊は隱岐の西北なる竹

抵抗



島の南方にて、此の敵を包圍せり。是なむオボカドフ少將が、撃ち残されたる主力を率ゐて北方に奔る。一隊にて、戦艦海防艦巡洋艦合せて五隻なりしが、敗餘の殘艦已に抵抗の力なく、我が艦の砲火を開くや、忽ちにして白旗を立て、降意を表しければ、特に將校以上に帶劍を許して、其の降を受けたり。ひとり巡洋艦イヅム

利用

ルードは其の快速力を利用して、遂に北方に逃れ去りぬ。

極力

こゝに、驅逐艦、陽炎は鬱陵島附近にて敵の驅逐艦を發見し、極力追撃して、午後五時砲火を開きしに、敵は白旗を掲げて降を乞ひ、艦内に將官の在ることを信號せり。事の様不審なれば、我が士官は日本刀を帶し、兵は小銃を携へて臨檢せしに、豈料らんや、敵の司令長官ロジエストウエンスキー中將及び幕僚等こゝに忍び居たり。中將は重傷を負ひたれば、その懇請を入れて、只數人の將校のみを我が艦に收容し、綱

幕僚

豈料らんや

懇請

横暴

を以て降艦を曳きて佐世保に入りぬ。昨日までは大國の司令長官として海洋に横暴の限を盡し、が、今日は捕虜となりて敵國の士官に連れられ行く。あはれといふも愚なり。

捕獲

抑留

無慮

此の如くして、敵艦三十八隻の中、八隻の戦艦は、其の六隻を撃沈し、其の二隻を捕獲し、其の他、装甲巡洋艦以下も、或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、若しくは武装を解除せしめたり。敵艦の逃れ得たる者僅に二隻のみ。捕虜は司令長官以下無慮六千と註す。而して、我が失ひし所は水雷艇三隻、死傷六百餘人にして、

其の他艦艇に多少の損害を受けたれども、今後の支障あることなし。

宸聰

捷書宸聰に達す。五月三十日聯合艦隊に勅語を賜ふ。其の中に宣へることあり。

祖宗ノ神靈

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌ブ

東郷大將奉答の語に亦曰へり。

御稜威

此ノ海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ陛下御稜威ノ普及及ビ歷代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラズ

有史以來

實にかくの如き大勝は、有史以來の海戰に、未だ曾てその比を見ざるなり。

水

一七、潜航艇を觀る

怪物

怪物が來た。恐るべき海底の怪物が來た。併し、それは河童でもなければ、鯨でもなく、帝國の潜航艇第八號であつた。雛が親鷄に連れられて歩くやうに、母艦駒橋に連れられて、おとなしくやつて來たのである。

母艦

私等が見物に行つた時、艇長は母艦の甲板上で、魚

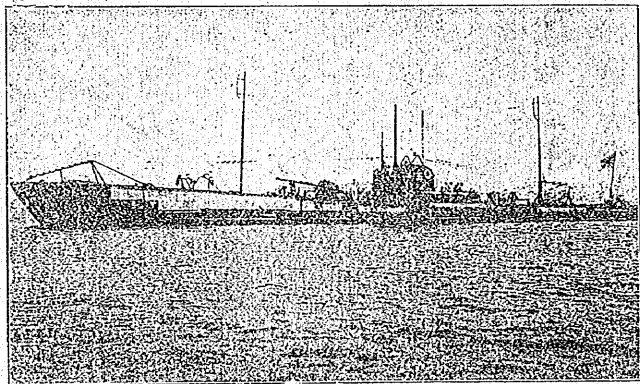
簡單明瞭

形水雷と潜航艇とに就いて、簡單明瞭な説明をせられた後で、部下を指揮して實地に潜航して見せてくれた。

威力

全體の形は魚形水雷と殆ど同形である。強ひて異つた點を求めたならば、中央甲板上に司令塔の立つて居る事と、艦が彼ほど尖つて居ない事位のものである。現今、艇の大きさは、大抵四百噸より千噸に至り、速力は水面上にあつては十四乃至二十節、水中を潜航する時には其の三分の二に減ずる。こんな小型でも、其の威力は驚くべきもので、うまく行けば何萬噸の

航續力



戰 利 獨 逸 潜 航 艇

大艦をも一撃の下に斃して了ふのである。航續力の最大距離は、水中に於て百二三十哩に過ぎないが、水上航行に於ては三千五百哩乃至五千五百哩に達する。母艦の甲板上で艇長が部下乗組員に號令を下すと、二十七名の艇員は身輕に繩梯子を下りて、艇に乗

徐々

り移つた。司令塔に立つた艇長が再び號令を下すと、艇は徐々と進行しはじめた。此の時艇長は云つた、只今は電力で動いて居るのです。と。一體水面においては、ガソリンを使用して走り、水中においては電力によつて航するのであるが、直ぐ潜航するのであるから、始から電力を用ひたのである。この電力は、豫て母艦から送電してもらつたのを貯電してあるのである。

號令三下、甲板上に居る艇員は極めて敏速に、欄干、竿、檣、旗等を倒したり外したりして、最後に甲板上の

密閉

突如

漸次

窓を外部から密閉した。やがて、艇員は司令塔上の出入口から、一人没し二人没して、最後に艇長が、司令塔から影を没する頃には、艇は著しく沈下した。そして艇の右舷には、海水が眞白に沸き上つて居る。沈む沈む、段々沈んで、遂には司令塔を一二尺残す迄に沈んだ。艇長の先程の説明から考へると、今は丁度底の室には、海水が一杯入つた時であらう。突然艇は疾走し始めた。それと同時に漸次没して行つて、遂には僅に展望鏡の管が残つてゐるだけになつた。一同が「あれあれ見えなくなりさうだ」と云つてゐる時、突如其の

尖端

影は波底に沒した。穩かな波の上には、釣する舟が無心に浮んで居るばかり。艇は何處をどう走つてゐるか少しもわからぬ。稍あつて、展望鏡の尖端が現れたかと思つたら、復た沈んだ。

艇は自身が発見されずに、敵艦に近づく必要上、潜水するものゝ、水中に沒しては、丁度盲目の魚が泳ぎ廻る様なもので、一寸の先も見えぬ。それ故、何とか工夫して、自分の體を見られぬやう、敵の様子をばよく見得る様にしなくてはならぬ。この工夫として出来たのが展望鏡である。展望鏡の構造の大體を云ふと、

大體の構造は、
鏡明ニテ、
次項ニテ、
ワカレカ
ミヤ不階

狡猾

長短二本の管が司令塔上に立つて居て、前にある短い管の上端には鏡が一つ、後にある長い管の上端には、稍高さを異にして二つの鏡が備へてある。獨逸の潜航艇は、贗物の展望鏡を浮かして置いて、敵の船艦が狼狽して居る所を、本物が横合から行つて撃沈するといふやうな、狡猾な手段を取つたこともあつたといふことである。

艇が水中に沒しても、此の展望鏡さへ水面に出て居れば、水面上の物體は此の鏡に映り、それが、又管を通つて下部の鏡に映るので、居ながらにして、水面上

細大漏さず

の事物を細大漏さず見る事が出来るやうになつて居るのである。

肉眼

さて、遙か彼方、肉眼でやつと展望鏡の尖端が見えるあたりを、艇が疾航して居ると、母艦には異様な音響——それは電信局で電信を打つ音を強くしたやうな音響——が起つた。これは母艦から信號を發したものである。艇は見る／＼方向を轉換して、此方を目がけて慕進して來た。親鷄がコゝ／＼と呼ぶ聲に應じて、雛がピヨ／＼と鳴きながら來る様に見えて、潜水艇も誠に可愛らしいものと思はれた。

慕進

舊態

驟鼠

母艦から、百メートル許りの所で停船した艇は、見る／＼浮き上つたのである。
艇がだん／＼浮き始めた頃、司令塔には艇長の白い姿が現れた。それから段々と艇員が甲板上に出て、それ／＼の任務に服し、見て居るうちに、全く舊態に復したのである。狭苦しい艇底から出て廣々とした海面を眺めた時は、さぞ氣持が好いことであらう。
尙、茲に面白い話がある。それは艇内に五六尾の驟鼠を飼つて置く事である。此の鼠は、汚れた空氣には極めて弱い動物であつて、人間には何とも感ぜぬ内

未然

からころ／＼斃れるので、艇員は此の鼠の様子を見て、危険を未然に防ぐと云ふことである。

艦艦

潜航艇が恐れられるのは、肉薄して魚形水雷を發射するからである。發射管は艇の最前部の室内にあつて、其の口は艇の最尖端に二個相並んで開いて居る。艇が適當な距離に接近して、一度水雷を發射する時は、如何なる艦艦巨艦も忽焉として底の藻屑となつて了ふのである。

莫大

今回の大戰亂にも、獨逸が無制限なる潜航艇戰を開始してから、聯合國の被つた損害は實に莫大なも

杜絶

記念

ので若し日本海軍の出動でもなかつたならば、地中海上の航行は全く杜絶してしまつたであらう。然るに、それほどまでに荒れ廻つた獨逸の潜航艇も、所謂力竭き勢窮りては亦如何ともすべからず、其の七隻は、戰役の記念として品川灣に怪物の正體を横へることになつた。英雄の末路、否、狂暴潜航艇の末路も亦憐なものである。

一八、東京

平出鏗次郎

月影の草より出でて草に入るといはれし武藏野

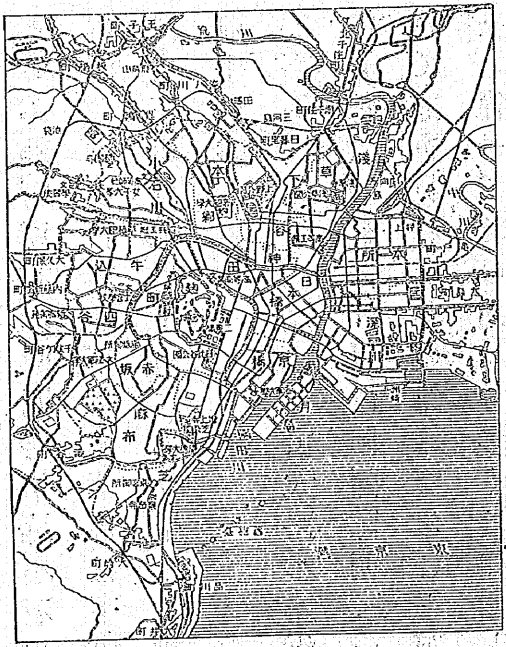
潜航艇ノ
力竭キ勢
窮リテ
リトイフニ
アラビ
誤解ナシ
スルニ
記念

大正五年
人口 二百十八萬
規模
新橋
大正五年
人口 二百十八萬
規模

も、三百餘年の昔、江戸幕府のこゝに置かれてよりは、
 薨より出で、薨に入る月を眺むるやうになりぬ。明
 治天皇都をこゝに奠め給ひて、東京と呼ばれること
 となりて四十餘年、家居はいやましに榮えて、民草日
 毎に繁りゆき、戸數五十四萬、人口二百十八萬、市街の
 規模、町のにぎはひ、實に東洋第一の大都會たるに恥
 ぢず。

宮城は市の中央高臺にあり。もと江戸城の西丸な
 りし處を下して御造營あり、明治十七年起工して二
 十一年に落成す。建物の坪數一萬餘坪ありといふ。四

(一萬二千餘坪)



重の奥深く玉の薨を拜すべし。吹上御苑は面積十五
 萬坪、林泉殊に幽邃なりと云ふ。

幽邃

丘隴

東京の地、西南は丘隴相連れども、東北は概ね平坦なり。西南の臺地を山の手といひ、東北の平地を下町といふ。麴町・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷は山の手に屬し、神田・日本橋・下谷・淺草等は下町に屬す。大なる商店・工場は大抵下町にあり、學校・貴紳の邸宅等は山の手に多し。

交錯

基盤割
阿彌陀割

錯雜

市街は四通八達にして、大路小路縱橫交錯す。俚俗に、「京都は基盤割、江戸は阿彌陀割」といへど、地圖を繙いて之を見れば、其の錯雜なること阿彌陀割よりも甚し。従つて其の通りも多くは迂回して、北し、西し、或

軌道

一新

は東し、南す。されば都人は其の道筋をいふに東西の語を用ひず、常に左右の語を以て之を辨ず。近年市區を改正し、車道と人道とを區別し、中央に軌道を設けて電車を通じ、兩側に電信線・電話線を架し、地下に水道・瓦斯管を設くるなど、市の體裁は殆ど面目を一新せり。

靈廟

絶佳

公園の中、最も廣闊なるは上野公園にして、之に次ぐは芝公園なり。前者は寛永寺、後者は増上寺の在る處にして、徳川氏の靈廟今に存す。

上野公園は不忍池を擁して風景絶佳、春時の櫻花

最も世に著る。博物館動物園また此の域内にあり。共進會美術會園藝會を始め、各種の展覽會こもぐここに開かれ、四時遊觀の客絶ゆることなし。

朱門翠蓋
碧波浩蕩
胸襟を闊くす

芝公園は増上寺の山門の邊、青松多く、朱門翠蓋相映じ、頗る幽靜なり。その丸山に登れば、眼下に東京灣を望み、碧波浩蕩の中に風帆の隱見するさま、自ら胸襟を闊くす。

賽人絡繹

淺草公園は觀音堂の在る處なり。殿宇壯麗、丹碧相輝き、賽人絡繹として跡を絶たず。仁王門より雷門の址に至るまで、仲見世と稱へて、小屋道を挟んで軒を

花卉

列ね多く玩具、繪草紙の類を、商ふ。參詣の者多くはここに歸りの土産を求む。
日比谷園は市の中心たる丸之内にあり。その地宮城に近く、洋風の公園なり。園内に四季の花卉を培養して、人目を喜ばしめ、又運動場ありて、市民の自由に使用するを許す。

發展

およそ首府の發達は常に其の國の發達に伴ふ。日本帝國の隆昌、益その度を高むるにつれ、東京市の發展また將に底止するところを知らざらんとす。武藏野の末なりし昔を想へば、誰か今昔の感なからん。

(東京風俗志)

一九、世の中

坪井正五郎

東京ならば、芝の愛宕山、或は、上野の櫻ヶ岡、他の都會でも、これと同じやうな高い所に登つて、眼下を見下すと、大小高低、簡單複雑、種々雑多な屋根が、無數に見えます。此等の屋根の下には、何があるのか、何が行はれてゐるのか、固より透き通して見ることは出来ませんが、想像を馳せて、大概を推測することは出来ます。

推測

團欒

滑稽

千差萬別

千態萬狀

或屋根の下では、親子團欒して食事をしてゐるかも知れません。職業に身を入れてゐるものもありませう。職務を終へて遊んでゐるものもありませう。深遠な學理の研究に精神を勞してゐるものもありませう。滑稽な落語を聞いて、腹を抱へてゐるものもありませう。出産を賀するもの、死亡を弔するもの、千差萬別、千態萬狀、壁一重の鄰、同志も、道一筋の向ひ、同志も、様々の異つたことに會つて、様々の異つたことをしてゐるに違ひありません。一度、思を人間に寄せるときには、靜な屋根も、俄に活動するが如く感じられます。

ます。

これは、一ヶ所に止つての考でありますが、假に身を飛行船中のものとして、心に空中旅行を想像し、屋根の多い都會の地を去つたとすれば、眼に映じて來るものは、何てありませうか、人の耕す田畑も有りませう。人の住む村落も有りませう。人の木材を伐る山林も有りませう。人の魚介を探る河海も有りませう。都鄙を問はず、水陸を論ぜず、凡て眼の及ぶ限り、殆ど人に關係のない所はありませぬ。海洋を越えて、他國の境に入つたと思はせうか。何れの地にあつても、嘗

魚介

人爲

蒐集

に、住居の有る所が、人に用ひられて居るばかりで無く、殘餘の地も、或は自然に任せ、或は人爲を加へ、衣食住の原料蒐集の場所として、人に用ひられて居ります。陸には車馬が有り、海には船舶が有り、徒歩の及ばぬ所も、人は能く往來して居ります。

地球は、單に水土金石より成る塊ではありません。地球は、單に禽獸草木を載せる臺ではありません。地球は、人のあるが爲に、連續した一大舞臺と成つて居ります。人が地を以て己の用に供するには、嘗に自然の形に於てのみでなく、或は岡を平らにし、谷を埋め、

或は岩を穿ち流を轉じ、或は島を築き地峽を斷ちます。人は地球を舞臺とすると云ふよりは、寧ろ地球を我が意に適つた舞臺に作り上げると云ふ方が、正しいであります。

利用
人は、又、金石をも、植物をも、動物をも、意のまゝに使用します。人は、又、水力、風力、電氣力の如き自然の力をも、我が目的を達する爲に利用します。人は蹈む所の地、及び、其の地に産する諸物を自由にすると云ふのを以て満足せず、己の勢力を無形の自然力にまで及して居ります。

好奇心
人と云ふ者は、實に種々の面白い事を爲る者ではありませんか。人と云ふ者は、實に面白い者ではありませんか。かう考へて見る時には、好奇心が缺けて居ない限り、誰も此の面白い事をする、此の面白い者に就いての智識を得たいとの念を起すであります。

興味
我等は、此の智識を得たいとの念を起す者であると同時に、自身、此の面白い事をする、此の面白い者たる人類其の者であります。人の身に取つては、知りたいたと思ふ事も、澤山有り、知らねばならぬ事も、澤山有ります。人にして人を知ると云ふことは、興味の深く、且

實益の多い事の一つ、否其の第一に位すべきものと云つても宜しくあります。(人類誌) 此事は新田君の人類誌の卷二より、人の生活の進歩の程度を以て、二〇、都會と田舎、と云ふ。坪内雄藏の都會と田舎といづれが住みよかるべきか。この問に對しての答は、恐らく人によりて異なるべし。平生田舎にのみ住める人は、なまぐ、大都會に立ち出でなば、繁華と便利とに驚きて、或はいつまでもこゝに居つきたしと思ふべく、都會にのみ住める人は、恰もその反對に、田舎の長閑さを羨むべし。人はともすれば

長閑さ

四通八達

鱗次櫛比

ば他の境遇を羨むものなり。けにや、都會は繁華なり。街路は四通八達し、電信線は蜘蛛の巢の如く、大廈高樓は鱗次櫛比す。夜も電氣燈の光晝を欺き、車馬絡繹として、行人絶ゆることなし。けにや、都會は便利なり。電信や、電話や、郵便や、その送達迅速なれば、瞬くひまに數十里の外と通信すべし。汽車あり、人力車あり、電車あり、自動車あり。運輸交通の便、備らざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あり、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、新聞社あり、百般

娛樂

の商店、悉くあり。諸の實用諸の娛樂、意の如くならざるはなし。要するに、都會はにぎやかなり、花やかなり、娛樂多し。都會の生活を、人の羨むも宜なり。されど、又永く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。物價貴ければ、出費多く、交際繁ければ、萬事うるさきこと多し。世間は年中いそがしく騒がしく、街路は朝に晩に雜沓し、砂ぼこり煙の如く立ち舞ひ、空氣の不潔なること甚し。總じて、傳染病などの流行は、家屋稠密の地にはじまれば、都會が衛生上によろしからざるは明なり。まして、火災などの憂も都會に多かるをや。

うるさし

雜沓

稠密

清爽

幽趣

都會の生活は危險なりといふべし。

田舎には、都會の如き繁華もなく、又、都會の如き便利もなし。されど、その生活の心安さと、その山水の清き眺めと、その人情の淳朴なると、その空氣の清爽なるとは、都會に求め難き賜なり。春の花見、薇取り、秋の紅葉狩り、茸狩り、夏の涼み、螢狩り、冬の雪見さへ、都會の人の深く羨む樂ぞかし。

かれの便利に代ふるに、これの長閑さ心安さあり。かれの繁華に代ふるに、これの幽趣あり。いづれを優れりとも定め難し。はでなる娛樂こそ田舎の住居に

利器

乏しけれ、衛生上及び、その他の危険なきは、その失を償うて餘りあるべし。

さはあれ、都會には、學問・藝術をはじめ、文明の利器・機關は、すべて集り、また、絶えず進歩發達せり。田舎は全くこれに反す。知見を廣め技能を磨かんと欲する者、又は、大なる事業に従はんと欲する者は、到底田舎にのみ止ること能はざるべし。この點は都會を優れりとす。

安住靜養の地

要するに、都會は修業の地なり、事業の地なり。安住靜養の地としては、田舎のがた遙に優れり。(國語讀本)

椒房

養蠶の業は、我が邦神代の頃より開けしが、應仁の朝に至りて、殊に進歩せり。それより代々其の良法を遠く三韓及び支那にも求めて、これが普及を計らせ給ひ、椒房の裡、夙に蠶室を設けて、后妃親らこがひの業を營み給ひしことすらありて、専らこれを獎勵せられしかば、廣く全國都鄙に行はるゝに至り、以て今日に及べり。

畏けれども、過ぎにし明治の大御代にも、英照皇太

しんしむ
ア他勤
ツカッ
リッ

溝渠畦畔

后昭憲皇太后、ともに御園に蠶室を營ましめ給ひき。今また皇后の宮には、猶一層斯業の隆盛を期し給へる大御心にや、新に吹上の御苑に廣らかなる蠶室を作らせ、此所に養蠶の道をいそしめ給ふと承る。抑も、蠶桑は我が風土氣候に適したる産物にして、我が國の富源は實に是より湧き出でつゝあり。されば、斯業は宜しく専門の人の、いよく、ますく、良法を尋ね、研究を積み、以て能く其の業の擴張進歩を計るべきは云ふも更に、農家耕耘の餘暇、其が田園に五穀菜蔬を植うるの外、溝渠の岸、畦畔の傍、到る所の

徒然

たづき

空地に桑樹を植ゑて、婦女をして蠶を養はしめば、また大に其の經濟を助け、其の生計を高からしむるに足るべし。かくの如く、農家の婦女をして養蠶を務めしむべきのみならず、都會に住する所の女子、なほ進みては良家の婦人も、亦其の珍卉名花を培ふ庭園の幾分を割きて桑林となし、かたへは長き日の徒然を慰めがてら、運動の一つとして蠶事を經營せらるゝに於ては、満身の綺羅もかゝる小蟲が巢がける一線よりなれるの勞を思ひ知るたづきともなるべく、取りたる絲もて絹帛を織らしむるも、亦多少利する所

一〇九
良家ノ
婦人モ
勤シ他ノ
モノヲ
庶
民トイフハ
リカシ

あるべし。然する時は、上の好む所下これに従ふの理にて、庶民の是に習ふも、亦少からざるべし。希はくは、女子手工の大切なるを覺知せらるゝ所の人々、爲に奮ひて蠶桑の業に力を用ひられんことを。

(女子手藝要訣)

二二、田植の歌

もろ聲に いざ賑しく、
歌ひて植ゑよや 門田の早苗、
此の早苗こそ 千五百の秋と、

名におふ國の 瑞穂の稻。

もろ共に いざ勇しく、

きほひて植ゑよや 山田の早苗、

此の早苗こそ、 四千餘萬の

わが同胞が 命の本。

賑しく 又勇しく、

歌ひきほひて 植ゑよや植ゑよ。

植うるは吾等が 務のみか、

同胞のため 御國のため。

(唱歌教科書)

報酬

二三、蒔かぬ種は生えぬ 丘 淺次郎

「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、常に人の言ふ所である。骨を折らなければ善い報酬を得ることは出来ないといふ意味で、勉強勤勞の方に人を導く爲にはよい教訓である。ところが、生物學の方面に於ては、蒔かぬ種が生えるといふやうな考を持つて居る人が、世の中には随分多い。昔は、蛆といふものは、肉などが腐ると、そこへ自然に涌くものであると信じて居たが、イタリア人のレヂといふ學者は、このことの眞

かどうかを、實驗によつて確めようと思つて、こまかい金網で肉を蔽つて置いた所が、何日過ぎても、いくら肉が腐つても、蛆が一疋も出来なかつたので、蛆は決して種のない所に自然に涌くものではない、全く蠅が來て卵を生み附けるから、それが孵つて蛆になるのであるといふことを知つた。

生物學上で、蒔かぬ種は生えぬ」といふことが解つたとして、人間の生活には何の役にも立たぬと考へる人もあらうが、實は、この理は、現在非常に人生に利益を與へて居る。

近來、大に發達した消毒法などは、全くこの理を實地に應用したものである。もし病氣の基となる微細な生物が種がなくても自然に涌くものであるなら、當今の消毒法は何の役にも立たぬ筈である。又、現時盛に行はれて居る食物の罐詰なども、この學理によつて工夫したもので、物の腐敗するのは、目に見えぬ小さな生物の働であるから、この生物の種のはひり込まぬやうに食物を封じて置けば、何時まで置いても腐らぬ筈であるといふ理窟から考へ出したのである。

粗漏

この外にも、蒔かぬ種が生えるといひ傳へて居ることは種々あるが、いづれも觀察の粗漏である故か、又は、推理の法が精密でない故かに原因する。例へば、新しく掘つた池に、翌年から蜆が涌いたとか、鰻が涌いたとかいふことは、屢聞くことである。一寸考へると、これらの動物は、なか／＼乾いた地の上や空氣の中を飛んで行く力はないから、山の高い所などに新しく掘つた池に居るのは、全くその場所に自然に涌いたのに相違あるまいとも思はれるが、十分に調べて見ると、鰻でも、蜆でも、随分遠く隔つた所まで、

孵化

行けぬとは限らぬことがわかる。鰻などは、元來海中で孵化するもので、初は、幅の廣い、透明な、白魚のやうなものであるが、成長するに隨ひ、身體がだんくんに縮り、幅も狭くなり、色も次第に黒くなつて、所謂針鰻に變ずる。この針鰻は幾千も幾萬も群をなして河を溯り、次第に細い溝などへ進み、雨でも降ると、隨分道路を横ぎつたり、草の間を匍つたりして、どこまでも進んで行く性質を持つて居るから、終には、山の頂に近い所の池にも達することが出来る。鰻の發生の模様は、近年まで詳しくは知れてゐな

かつたが、今は十分にわかつて、これまで海濱で屢人の採集したびいどろりをは全く鰻の幼兒であるといふことが確かになつた。

又、貝類などが新しい池の中に生ずることは、鰻よりは一層不思議に思はれるが、やはり、これも外から移つてくる方法がある。貝類の幼兒は二枚の殻を開閉して、雁鴨などの羽毛に附著することがあるから、一方の池から他の池へ貝の種が舞ひ込むことは、決して珍しいことではない。現に、或人が銃獵に往つて捕つた鵲の足に、大きな貝が挟み附いて居たことも

輕卒

斷言

あるのである。かやうに、よく調べて見ると、貝類などでも、遠方へ速にうつり行く手段はいくらかもある。それ故、去年掘つた池に、今年は貝が居るからといつて、直にこの貝はこゝで溜いたものであるときめてしまふのは、輕卒である。もとより、世界は廣く、吾々の知識は極めて淺いのであるから、何處でも、何時でも、種なしには生物は決して生ぜぬものである。と斷言することは出来かねるが、とにかく、今までの經驗によれば、蔦かぬ種は生えぬ。といふ諺は、その儘生物學の方へ採り用ひて、少しも誤はないやうである。

二四、雜草

幸田露伴

雜草といふものこそおそろしきものなれ。之を蹂みにじり、之を刈り薙ぎ、之を抜き棄て、之を焼き拂ひても、終にほろびうせたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我が世顔に生ひしげりて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひのけ、民の命と頼む稻麥をも虐げて、おのれのみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば、園守・田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ち其の咎を得て、花は色無く、穀はみのらざるに至る。さ

佳報

惡果
造化の鞭

れば世に若し雜草といふものなかりせば、能く勤むる者も、一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は、皆同じ報を得べきに、これありて勤むるものは佳報を得、惰るものは惡果を得。雜草は人間の怠惰を警むる造化の鞭にやあらんとおそろし。(潮待ち草)

二五、農業の快樂

徳富猪一郎

農業は人をして健全ならしむ。すべての人は、樹木と同じく大氣中に生活せざるべからず。農業の生活は概して戸外的なるを以て、最もこの目的に適へる

著實

妙理
領會

ものなり。

農業は人をして著實ならしむ。いかに性急なればとて、播きたる種の直に實らんことを望むものはあらじ。また、いかに奇法ありとも、播かぬ種の生ずべき理は無からん。所謂「人事を盡して、天命を待つ」といふ妙理は、手を農業に染めて、はじめてよく、これを領會するを得べきなり。

農業は人をして科學的知識を養はしむ。農業は常に天然と接するものなり。されば、播種培養の法、その發達、その變遷、その妙機は、仔細にこれを觀察するこ

會得

とを得べく、また、その間におのづから因果の法則の整然として動すべからざるものあることを會得し得べきなり。

美趣

農業は人をして美趣を解し、詩情を養はしむ。支那の陶淵明は嘗てその詩情を田園に養ひ、その詩材を農桑に取りて、千古の大詩人となることを得たりしにあらずや。その他、詩趣を無名の野花・幽草の上に討ねて、自然の美を歌ひ出で、大詩人たる名譽を荷ひ得たるもの、東西古今、その例に乏しからざるなり。農を本業となす、もとより可なり。他の職業に従事するも

詩趣

餘業
掌大

霄壤の差

の、これを餘業となす、亦頗る可なり。掌大の庭園も、數株の花木を培養するにはあまりあり。況や、かの地方に別墅を有する人においてをや。かばかり容易なる事はなかるべく、また、愉快なる事もなかるべし。これを、かの鳥獸を殺戮して一時の快を貪る銃獵の如きものに比すれば、その趣、その樂、豈に啻に霄壤の差のみならんや。

誕辰

二六、皇后陛下御誕辰

六月二十五日は皇后陛下の御誕辰なり。この日、宮

中にては左右の臣僚を召して、祝賀の御内宴を催させ給ふ。もと公式の祝日にはあらねど、全國の各女學校にては、特に業を休みて、祝賀の式を舉ぐる例となせり。

坤德
陛下は明治十七年の御誕生にましく、明治三十三年十月三日皇太子妃とならせ給ひ、今上天皇陛下御踐祚と共に、皇后の御位に直らせ給へり。そもも陛下が御坤德の高くおはすこと、今更申すも畏き極みなれど、溫良貞淑、よく内助の實を盡させ給ひ、殊に仁慈の御心に富ませ給ふことは、その御天性とも

秋宮

申し奉るべからん、又御手づから蠶を養ひて、勤儉質素の德を示し給ひ、常に國產品獎勵の法を講ぜさせ給ふなど、椒房の内訓、秋宮の母儀は、畏かれども我等女子が徳行の模範と仰ぎ奉りて、學術技藝を修め習ふ上にも、此の心ばへを謬ることなく、御心に副ひ奉らざるべからず。今日のめでたき日に於て、かく修養の教訓を得たるは、いとも幸多きことならずや。

景物

二七、螢の話
渡瀬庄三郎
「螢は、たぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。」

すだく

水に飛びかひ、草にすだく、五月の闇は、たゞこの物のためにやとまでぞおぼゆる。と、也有が云うてゐるが、實にその通りで、亂れ飛んでは、降りみ降らずみの空に、何の星かと疑はれ、叢に集つては、時ならぬに何の花かと怪まれる。螢の壯觀は、昔から人の目を惹いて居る。

聯想

さて、螢といふとすぐに火といふ聯想が起る。ほたるといふ語は、火垂ほたけ或は火照ほてりといふ意から出たといふ。支那では、夜光照夜、宵燭、挾火などの異名があり、その他、何れの國の言葉でも、螢と云ふ名は、皆火に縁の

賞翫

故事

ある語である。

この螢を、春の花秋の紅葉と同じく、一種の景物として、昔から賞翫して居ることも、代々の詩歌文章などに出てゐるが、螢火を盛つて書を照したといふ晉の車胤の故事が最もよく知られて居る。螢を燈火の代用にした例は、東西何れの國にもあることで、昔、北亞米利加のメキシコ海岸では、海賊が多くあらはれて、船客を脅し、積荷を奪ひ去るので、船人は非常に恐を抱き、夜間の航海には、海賊よりの目標となる燈火を滅し、螢を籠に入れて、その光で用を辨じたといふ。

拇指

また、亞米利加の土人は、暗夜深い森の中を行くに、大きな螢を足の拇指に縛りつけ、その光で足もとを照してあるいたといふ。かく螢の光によつて暗夜をたどる事は、現に我が國にもある。近江國守山・今宿地方は、螢の澤山生ずる處で、全く提燈は要らないさうである。キューバ島では、婦人が螢を絲につないで、胸飾とし、頭飾ともする。尤も、この邊の螢は一寸餘りもあるから、丁度夜光の珠の飾でもかけてゐるかのやうで、誠に美しいさうである。ベーコンの博物書には、昔英吉利の片田舎の村では、子供が螢を透明な瓶に入

草昧未開

れて流に沈め、その光をあてに寄つて來る魚類を捕へたとある。其の他、わが國の某地方では、養蠶の時、螢を多く集めて蠶室に備へ置き、鼠の害を防ぐために使用してゐる。

かく、螢火を燈の代りに用ひる事は、世界到る處に行はれてゐる。恐らくは、燈火の發明のない草昧未開の時代には、螢は随分廣くその代用を務めたものであつたらう。(螢の話)

二八、夏の樂

徳富猪一郎

一掬の涼風

石も木も、眼に光る暑き時節とはなりぬ。夏は暑しといへば苦しきやうなれども、暑さの側には涼しさあり。一掬の涼風、千萬金にも價し難し。たのしみは夕顔棚の下すゞみ。嗚呼、この樂や、眞に人生の最も健全なる樂にあらずや。

一家うち寄りて笑ひ興ずるは、夏を以て最上の時節とす。遠方に遊學したる少年少女も、避暑休暇には歸り來るなり。迎へらるゝものゝ樂はいふも更なり。迎ふるものゝ樂はた如何ばかりぞや。

慈母が夢に見し小童の姿とおもひの外、今は立派

さうやく

なる青年となり、挨拶も大人びたるも興あり。家に在る幼弟・幼妹が人みちがひしつゝ、お客は何所より來ませしにやなどゝ、さゝやくも興あり。斯く寄り集りたる家族の相携へて旅行をなすも、また樂の一事なり。

逍遙

生白き小兒の顔も、日に炙られ潮に曝され、鳥の子の如くなるも面白し。涼しさは日の落ちかゝる海の上。沖の夕日の末霽れて、涼風天空より吹き渡る濱邊に、ひた／＼とうち寄する波に足を洗はせつゝ、一家老幼うち連れて逍遙するも、亦妙なり。

酣

或は、峰高く雲深き温泉に遊び、脚下に雷を聴き、袖に雲を宿し、里は夏なほ酣なるに、早くも溪間や野邊に咲き出づる秋の草花を探るもおもしろし。
獨樂しむは衆と樂しむにしかず。避暑旅行には、家族同伴すべきは勿論、またとき間柄ならば、甲家乙家、幾多の家族相伴ふも可なり。家族の聯邦共和國は、時によりては賑々しき快樂なり。併しながら、興盡くれば、各、その志す方へ別れゆくも可なり。臺所より外、天地あるを知らざる主婦の如きも、せめては夏なりとも、廣々としたる天地に呼吸し、命の洗濯をなすべし。

山青潮白
延命不老

わけて老人などは、くよくよと暑さ懶さを呟く愚をなさず、山青潮白の地に遊ば、延命不老の靈藥を飲むよりも幾倍の効能あらん。

匍匐

馬脾風

夏は小兒の天國なり。かれらが、厚き重き綿服に纏はれて、起歩自由ならざる冬を過して、蟬翼よりも輕き衣を著け、ころ／＼と奔り廻る様の如何に勇しきよ。冬に匍匐したる赤子も、夏になれば衣の輕きと共に、身も亦輕きが故に、起つやうになるなり。伏すものは起ち、起つものは奔る。かれらが、大敵なる感冒も來らず。更に恐るべき馬脾風も來らず。もし飲食だに愼

まば、小兒は夏に於ては無病息災なるべし。

されば、夏は最も樂しき休息の時節なり。老人も小兒も、その他、恒に家に在る主婦も、恒に外にありて俗務に従ふ主人も、總べての家族、皆うち連れて旅行すべし。これ衛生のためのみならず、亦心を養ふ所以なり。

午夜

もし、さる餘裕なきものは、家内うち寄り一個の板牀を庭に出し、松間よりちらりくと月の上るを眺め、老幼笑ひ興じて、月よりも大なる盤上の西瓜を割き、無邪氣なる話にて午夜を過すも可なり。夏の時節

を善く過せば、命の洗濯をなすのみならず、亦心の洗濯をなすべし。身健なれば心亦健なり。善根は快活なる心腸より養成せらるゝを知らずや。快活の心腸は、健全なる樂より養成せらるゝを知らずや。

二九、夏

中村秋香

若葉の梢

風なつかしく、

卯の花垣根

月面白し。

花たちばなの

薫れるゆふべ、

待たでも聞か

山時鳥。

うばら

いつしかちりて、

水鶏ぞ叩く。

垣根のあたり、

とびかふ螢。

三〇、暑中見舞の文(友人へ)

暑くは夏あけに解とてなると言ふ所あり
 つまひに新時々も去れどもにそゝりて日暮りたる
 月を空へ移たすに地球の浮老人揺り廻る程が
 はかりもたらずなりといふ中よなほこれ夏の一方へ

とあるをよみて、近々中へは出發の期合にしゆて、その
 前より系部いたる多し。又、何もの數なりとある右
 の如き、けほど希となつた一冊にふりて、清く
他事なごう、休耕されたることなる、水蜜桃を就
 めたり。からずさうして、玉山の巻地へ申しきり、ゆく處を到る
 所より遠路を歩みぬ。あんなに足味いとも有り、とて試
 みて自こむや、いと受留まり、ゆづ本懐のありしやう

まづは只中うゝを疎くすべし
只中見舞ふ文うへに
中より削降せよ

七月廿六

三〇、暑中見舞の文(友人へ) 同 返事

卷之三

同 返事

是中けねとあきれしうて鄭寧なりて文彦に遠東の成果
いかにうまれたる芳志あらずに辱れやとたりと是を
いへりともあけしうて皆に極く極くあやうと涙を
いふはあまたうなふに柳井も亦なりけりなりと
悔うなりしうあつたほどにいふ所をいへりなりと
是をすべからぬやうにうなふなりと人々も七言を既大
海にへぬ是れはうなふなりと人々も七言を既大
百の所のうにうなふなりと人々のうにうなふなりと
幼きもの虚勢の體質病坂の人等には極くうなふなりと

の住民として仕事つきのうなふなりと耐へりなりと
極くうなふなりと耐へりなりと耐へりなりと耐へりなりと
より常によりなりと耐へりなりと耐へりなりと耐へりなりと
何れも耐へりなりと耐へりなりと耐へりなりと耐へりなりと

七月廿八

その一

三一、夏季休暇

下田歌子

夏季休業中は、學に就ける子女の久々にて、父母の
側に居る時なるが、炎暑中の事なれば、随分にうちく
くつるぐ

活潑

つろぎて日頃の骨やすめを爲すもよし。涼しき處求めて、親・同胞と遊ぶは、また一段の樂なるべし。休む爲の休暇なれば、心身ともに愉快に、活潑に、樂しみて暮すべし。

されど、女子は學校に通ふ時代を過ぐれば、大抵は父母のもとを離れて、他人の家に嫁がねばならぬものにて、生家に居るはししが程なれば、せめて、長き休業の中だにも、兩親に孝行して、その手助をなし、その心を慰めまつらんと勉めざるべからず。さて、學問・技藝も朝夕の涼しき時、少しづつ、は忘れぬやうに心

かけて、復習をも爲し、又は作文の實習に日記をもつけ、遠國の親戚・知友に文書きおくりなどせんは、ことに有益なるべし。

三二、俚諺十則

- 一、可愛い子には旅をさせよ。
- 二、身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ。
- 三、雀の千聲。鶴の一聲。
- 四、狂人走れば不狂人も走る。
- 五、身から出た錆。

六、柳に雪折なし。

七、木に竹。油に水。

八、故郷忘じ難し。

九、井の内の蛙大海を知らず。

十、落武者薄の穂にも怖ぢる。

三三、自修

坪内雄藏

いかなる良き教師も、自修の心なき者を如何ともする能はず。昔より勝れたる人は、皆自修の人なり。自修とは、父母・教師の勧め促すを待たずして、自ら進み、

漏斗

自ら勵み、自ら勉めて、わが志すことを練習するをいふ。注ぎ込まるゝを待たずして、われに觸るゝものを吸ひ取るなり。漏斗に似ずして、海綿に似たるが自修なり。

さすがに

自修は、人間の下等動物と異なる點の一つなり。彼等も、幾らかは教育することを得れども、自修せしむることは難し。象は、さすがにかしこければ、稀には教へられし藝を自修することあり。鸚鵡も、亦時としては、教へられし言葉を復習すといふ。されど、これらは稀なる例なり。

自修は、教場にても、家庭にても、途中にても、爲し得べきことなれば、此の志ある者の進歩は、月日を重ねて著しきに至る。體も、心も、手も、足も、目も、耳も、自修次第にて、驚くべき發達をなせばなり。

器用
好きこそ物の
上手なれ

體育に熱心なる人の體格と、並の人のとを比べて、其の差の甚しきを見よ。或は音樂好きの耳の感覺の秀でたる、細工好きの手の器用なる、いづれも平生の心掛による。好きこそ物の上手なれ。とは、自修の効能をいへるなり。

間尺
専門

外國には、目積にて目方又は間尺を知ることゝを專

喜怒哀樂

ひとり

門とする者あり。遠方より見たるばかりにて、其の壺には茶ならば幾何、砂糖ならば幾何這入るべし、其の石は何貫何十目、その丸太は何間何尺など言ふに、あたらざるは稀なりとぞ。雀は並の人の目にはどれもこれも同じやうに見ゆれども、或老人の鳥刺は、一羽一羽に見分けて、今そこへ飛びしは、きのふ其處の枝に來居りし雀なり。それぞちらへおりしは、去年巢立ちたるにて、今飛びし雀の甥なり。などいひけり。鳴く聲も、喜怒哀樂、それぐに區別ありとぞ。これらは教へ得べきにあらず、又學び得べきことにてもなし。ひ

剛毅志

とり、自修の力のみこれを能くすべきなり。

自修の力を以てすれば、意志弱き者も剛毅となるべく、記憶鈍き者も物覺よくなるべく、手先の不器用なる者も器用となり、脚弱き者、腕力なき者、いづれも生れかはりたるが如くなることあり。

とりわけ、心立の自修こそ大切なれ。常に卑しき話、卑しき友に遠ざかり、勝れたる人、善き人の噂に親しみ、これを手本に、自ら學び習ふことを勉むる者は、年を経て、その手本に近寄ること必定なり。

三四、明治天皇の御遺物を拜すその一

笠井信一

皇靈

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたにより、私共は例刻に参内致しましたところが、十一時すぎ権殿参拜を御差許になりました。権殿と申すは、天皇崩御の後一年間、宮中に皇靈を祭らせられる處でございます。即ち、この度は、私共に先帝の皇靈を拜する特別の御恩典を與へられたのでございます。そこで、私共は極めて靜肅に、長く廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く権殿に

瞬間

靈感

詣つて、一人づゝ最敬禮を致しました。思ふに、其の瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打たれないものはなかつたでございませう。その權殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てられたのでございました。

萬機の政

親裁

それから、更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には長く此處に在らせられて、徳教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を修めさせられ、時に或は

膺懲の師
宏謨雄圖

瀟洒

質素

膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中で遊ばされたのでございます。然らば、どんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節、休息を許される御部屋の方が、却つて遙に御立派である。しかも餘り廣くない二間續きの御室であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も、眞に御質素なもので、絨毯の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取替を、屢願ひ出ましたが、御許がなくて、遂

に今日に至つたのださうでございます。

御室は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向に据ゑられてございます。私は御室の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらつしやらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭もなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年々に思ひやれども山水を

汲みて遊ばん夏なかりけり

の御製を思ひ起して、恐懼に堪へませんでしたのみ

連日

設備

一切

大御心

ならず、此の御室にはストーブの御設備がございませうけれども、三十七年の冬以來御用ひがない。竊に承るに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火を焚いてございましたが、先帝出御あそばさずや否や、火を消せ。と仰せられる。侍従は何故か分りませんが、唯仰せの儘に致しました。さてその後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許しあそばされなかつたとのことでございます。これは、勿論大御心を伺ひ奉るわけには参りませんが、侍従方の推測し奉る所によれば、當時、皇軍が滿洲の野に大

飢寒

敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第でありませうと申すことでございます。それ以來は、唯一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられたる御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな

すきまおほかるしづが伏屋を
でございます。

三五、明治天皇の御遺物を拜すその二

此の御室の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御室には、先帝の御學問所にて御使用になつた御遺物全部、其の儘に据ゑ置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時の儘に御備付になつてございました。床の間には、其の當時の御軸物が掛

光榮

けてあり、其の前方には御劍數振横はり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなど、は思ひも寄らぬこととございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召し上つて入らつしやつた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横へて、御熱心に御聽取あらせられた爲、煙草

が墜ちて此の焼痕を印するに至つたのだと申すこととでございます。さて此の焼焦のあるテーブルの羅紗を、御取換申し上げんがため、侍臣より幾度か願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し、何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取り寄せになつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはりのないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に

慙愧

御使ひ古しに成り墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鉢も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調に用ひた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと思つて、事々物々御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは赤阪の假皇居に在らせられた頃から、長く御

適當

使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるに至つた。そこで臣下より御取換を願ひ出しましたが、なに宜しい。とて御許がない。せめて御修理を願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍従が「此の邊は犬の皮です」と説明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる、白いボール箱やうのものが澤山に積み重ねてございましたから、

「何に遊ばす物か。」と侍従に尋ねました處、やはりシヤツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられたものであるとのこととでございました。

御裁可

御親裁

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後には、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、それに隨時御詠出の御製を御認めになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御

廢物利用

廻し申したのださうでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

詳細

冗費

一天萬乗の君

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、些かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乗の大君におはしましなから、禿びたる御

筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、そもくいかなる思召で入らせられませうか。皆、これ節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

獎勵

楮、御次の間には造花や彫刻や種々な物品が備へられてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御持ち歸り、又は御買ひ上げにならせられた物で、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のも

俗人の道樂

のでなく、何年前のものか、色も褪めはて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、其の儘になつてございます。その他、美術工藝品の如きも、皆御獎勵のためで、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられる。御製に、
○千よろづの民と偕にも樂しむに

ますたのしみはあらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうな御樂を求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大なる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を

隆々

以て隆々として進歩し、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は長い間聖天子御一人に、非常なる御心勞を御掛け申し上げたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民のちからのかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけれ

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても力のあらん限を盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應分の貢獻をなし、先帝の御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ひ奉る次第でございます。

服膺

貢獻

三六、病氣見舞の文

あつたば所也と稱せられを以て不例として平臥のうちに
のうき體うらなひなりと申すこと近き所のなりと申すこと
お過ぎなかりるなりと申すことなりと申すことなりと申すこと
只貴方の病氣を以ていふは、先帝の御高恩を以てお祈り
しに似たりと申すことなりと申すことなりと申すことなりと申すこと
い病人様の口よりいふことなりと申すことなりと申すことなりと申すこと
餘りお祈りのことなりと申すことなりと申すことなりと申すこと

八月廿五

同返事

[illegible]

いさふくしんわんきうは使もせおきたり。 幸

八月廿九日

三七、女子と手藝

下田歌子

手藝は女子が所爲の華なり。故に女子にして手藝に巧ならざるは、恰も樹の枝葉ありて、しかも花無きが如くなるべし。今や開明文化の世、もとより女子も學問無かるべからず。其の理を辨へ、道を知り、算を學び、文を綴る、亦甚だ必要の事たるべし。然れども、其の尊親に事へ、其の良人を助け、其の愛兒を撫で育むに

遊子

廻文錦字

征人斷腸の
悲

遜色

あたりては、衣を縫ひ、襪を編み、繡を刺し、帛を綴り、絲を紡ぎ、機を織るなど、能く女子の女子たるべき業を務めざれば、孝貞の道をつくすに足らざるところあるべし。誠に慈母が手中の絲は遊子の亂れたる心緒をも束ぬるに足り、節婦が廻文錦字の織物こそ實に征人斷腸の悲をも慰むるに足るべきなれ。傳へ聞く、英國女權擴張論者の隨一人として、女博士として世に云ひもて囃されたる「ホーセツト」夫人は、最も手藝に巧なる人なりき。すなはち、其の裁縫編物の如き、専門家と相比ぶるも敢て遜色なかるべかりしとぞ。女

女史

持説

必須

史は其の愛女に對ひて、經濟の學理を講じながら、良人の襯衣を編めるが、其の精神は舌端に躍りて、其の眼は少女が面上に注がれつゝも、絲は手に從ひて細密なる編目を作れりといふ。其の速きこと、さながら垣に巢がく蜘蛛のふるまひにも似たりとは、女史が動作を某氏の記したる讃辭なり。げに斯くてこそ女史が持説には良人先づ熱心に之に賛成し、以て天下の同感者に訴ふるに至れるなれ。況やホ婦其の人に及ばざる尋常普通の女子に於けるをや。希はくは女子が最も必須の業として修むべきものゝうちに手

よすが
一事兩得

藝を數ふることを忘れずして、他の諸學科を習ひ修むるひま／＼に、心がけたらんには、一つは學問に勞れたる心氣を轉換するよすがともなりて、一事兩得の益少からざるべし。(女子手藝要訣)

三八、眞の飾

金森通倫

ある家に三人の娘の子がりました。その父親はなか／＼の勤儉家で、子供が生れると、すぐ其の時から子供の爲に貯金して置いてやつて、著物でも髪道具でも決して好い物は買つてやりませぬ。著物は

主義

何時も木綿のみで決して絹物を著せませぬ。これは吝嗇でさうしたのでも、亦貧乏で出来なかつたのもなく、やはり勤儉の主義に基づいてやつたのであります。そこで、娘等の成長すると共に、彼等の貯金も段々と殖えて來ました。丁度、總領娘が十四歳になる時、父親の傍へ來て、おとうさん、勤儉貯蓄は大切ではあります、が、どうも折々困ることがあります。平常はよいですが、お向やお隣のお嬢様たちとお花見などに行きますと、皆立派な服裝でいらつしやるのに、私だけは何時も此の通りの木綿物ですから、何だか肩

工面

がすぼる様でいけませぬ。お、さうか、それでは肩のすぼらない工面をしてやらう。ちよつとおまへの貯金通帳をお見せ。―なるほど、澤山貯金が出来て居る。いくら有るか勘定して御覽。と、算盤を取つて見ると、はや一千三百二十五圓となつてゐます。なるほど、なかなか有るではないか。それでは、此の後お向やお隣のお嬢様達と御一緒に行く時は、何時でも此の通帳をおまへの肩のところへ縫ひつけてお出でなさい。さうすると決して肩のすぼる氣遣はないよ。まあ、より考へて御覽。お向のお嬢さんの縮緬の羽織はいく

値打

らするだらう。高くて三十圓でせう。お隣のお嬢様の襦珍の帯はいくらだらう。あれも三四十圓の物でせう。今おまへの貯金を引き出して買つて見なさい。あんな羽織や、帯は四十も五十も買へるよ。お前たちが何時も木綿の著物を著てゐるのは、おとうさんが貧乏で、著物が出来なからではない。造らうと思へば、別におとうさんに頼まなくても、自分の貯金ですぐ出来るではないか。それなのに、やつぱり綿服ばかりを著て居るのは、そこがおまへたちの値打だ。今は、お前たちが、熱心に學問して、いろ／＼な藝事を學ぶ時

智徳兼備

眞の飾

で、決して著物や髪の飾などに心を奪はれる時でない。立派な著物を著て人に見せたからつて、何の效能がある。今の内に一生懸命勉強して、徳を修め、智を磨き、謂はゆる智徳兼備の婦人とならねばならぬ。これがお前たちの眞の飾といふもの。其の上に、著る時が来れば、立派な著物も著るがよい。綺麗な飾も附けるがよい。今は、まださういふ時でない。一體日本の婦人には、自分の財産といふものがないから、縦令學問は出来、藝はあつても、他家に嫁入すると、すぐ夫の厄介物のやうになつてしまふ。お前たちは學問が出来上

つて、身に藝事を積むと同時に、貯金も亦段々と殖えて行くから、嫁入の時分には少しでも持參金として持つて行くことが出来る。お前たちは知るまいが、今いうたお嬢さんたちは、あんな立派な風をしてござるが、おまへたちとは違つて、たゞの一文も貯金などはないさうだ。又其のおとうさんは大層困つて、始終高利貸から責められ通したといふ事だ。親の苦勞をも察せずに、たゞもう、自分たちばかり立派な風をするなんて、何たる不心得のお嬢様たちだらう。世の中には、さういふ方が澤山あるのに、お前方は其の仲間

肝に銘す

に加つて居ないのが、仕合せものだと思ふがよい。」と
言つて聞かされたさうです。此の親子の問答の如きは、
實に今の娘子女たちが、肝に銘じて忘れてはならぬ事、
否娘子女たちは、かりてはありませぬ。娘を持つて御座
る親たちはどうか此の眞似をして貰ひたいもので
あります。

日本女學讀本卷一終

日本女學讀本卷一終

定價	卷一より各金參拾九錢
卷四より各金參拾參錢	
卷八より各金參拾參錢	

大正八年十月二十五日印刷
大正八年十月三十日發行

編者兼
發行者

帝國婦人協會

代表者

東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷參百九拾壹番地

井出 豐作

印刷者

楢山 定吉

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所

友文社

發賣所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社

明治書院

電話神田二三九八番

